国立国会図書館月報

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2019.11

憲政資料室の新規公開資料から

絵本に見るアートの 100 年　――ダダからニュー・ペインティングまで

本の森を歩く　鉄のカーテンの隙間から

703 号　2019 年 11 月

国立国会図書館月報

NO. 703
NOVEMBER
2019

CONTENTS

1 商業に於てハ決して政府の威権を假るへきものにあらす
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から
6 憲政資料室の新規公開資料から
15 絵本に見るアートの100年
——ダダからニュー・ペインティングまで
22 第21回　本の森を歩く
鉄のカーテンの隙間から
——戦後のソ連関係資料あれこれ
14 館内スコープ
何も起きないことが一番です
21 本屋にない本
『The history of Nifty ニフティ30年史記念冊子』
32 NDL Topics

表紙：
「常盤橋内紙幣寮之圖」
小林清親 画　福田熊治良
明治13（1880）1枚　23.2×34.6cm
（『清親畫帖』所収）
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2543380/42

商業に於てハ決して政府の威権を假（か）るへきものにあらす

大森　健吾

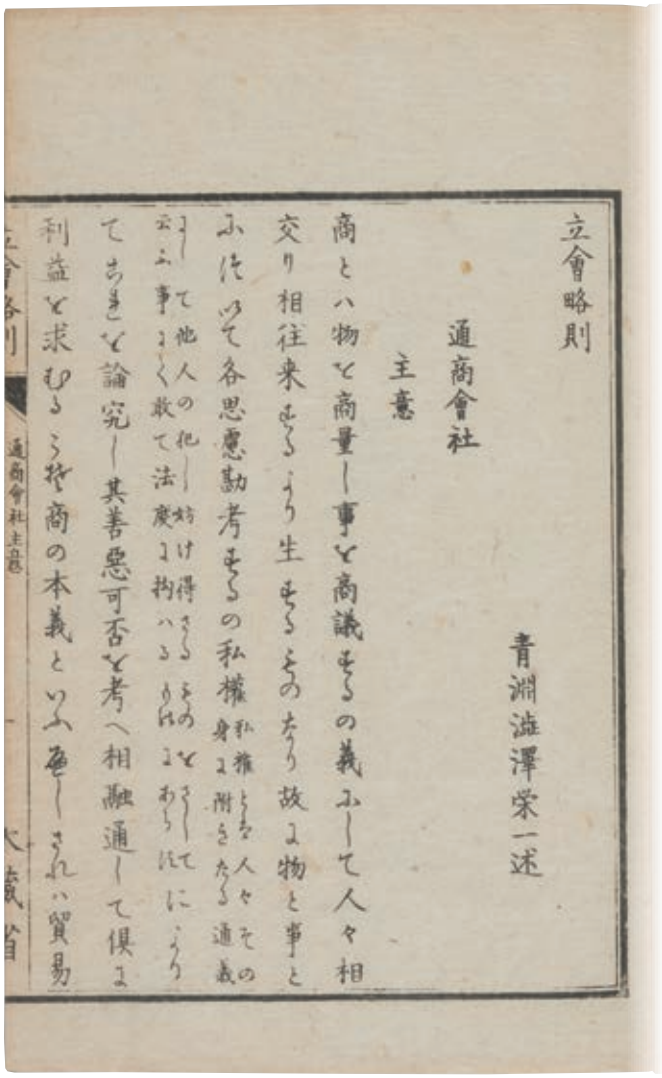
渋沢栄一肖像。
公表された新一万円券のイメージに近い構図。紙幣肖像は複数の写真から、本人の表情を立体的にとらえて作成される。
『青淵先生六十年史　一名・近世実業発達史第1巻』竜門社 編　竜門社　明33.2
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/781537/6

立会略則
渋沢栄一 述　大蔵省　1871.9　34丁 ; 23cm
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/994928（モノクロ画像）

財務省が日本銀行券（紙幣）の新たな図柄を明らかにしたのは、新元号「令和」公表の余韻が残る、平成31（2019）年4月9日のことでした。令和6（2024）年から発行される新たな千円券、五千円券、一万円券の肖像は、それぞれ北里柴三郎、津田梅子、渋沢栄一（ちなみに裏面は、北斎の「神奈川沖浪裏」、フジ（藤）、東京駅（丸の内駅舎））となりました。[1]

さて、紙幣に肖像が描かれる大きな理由は、人間の顔認識能力を利用した偽造防止にあるとされます。このため、人物選定の一般的な要件としては、①精密な肖像写真が入手できること、②紙幣にふさわしい品格のある容貌であること、③国民各層によく知られていることなどが挙げられます。[2]ちなみに、昭和38（1963）年に発行された「C千円券」[3]では、最終的に採用された伊藤博文と並び、渋沢栄一が検討過程で最後まで候補に残されました。その際に決め手となったのは、伊藤が豊かな髭をたくわえていたこと、つまり当時の技術では偽造が難しかった細画線を多用する容貌であったこととされています。[4]

紙幣肖像には、その国を代表する人物の事績を再認識させる効果も期待されていると考えられ、世界的には、政治家や革命家、


立會略則

通商會社

主意

青淵澁澤栄一述

商とハ物と商量し事と商議するの義ふして人々相交り相往来するより生ずるの名なり故に物と事とふたつにして各思慮勘考するの私權私權とは人々その身に附きたる通義にして他人の他し妨け得さるものと云ふ事なり故に法度に拘はるものとあらされとにかくてあまと論究し其善惡可否と考へ相融通して俱に利益を求むるを商の本義といふ色しされハ貿易

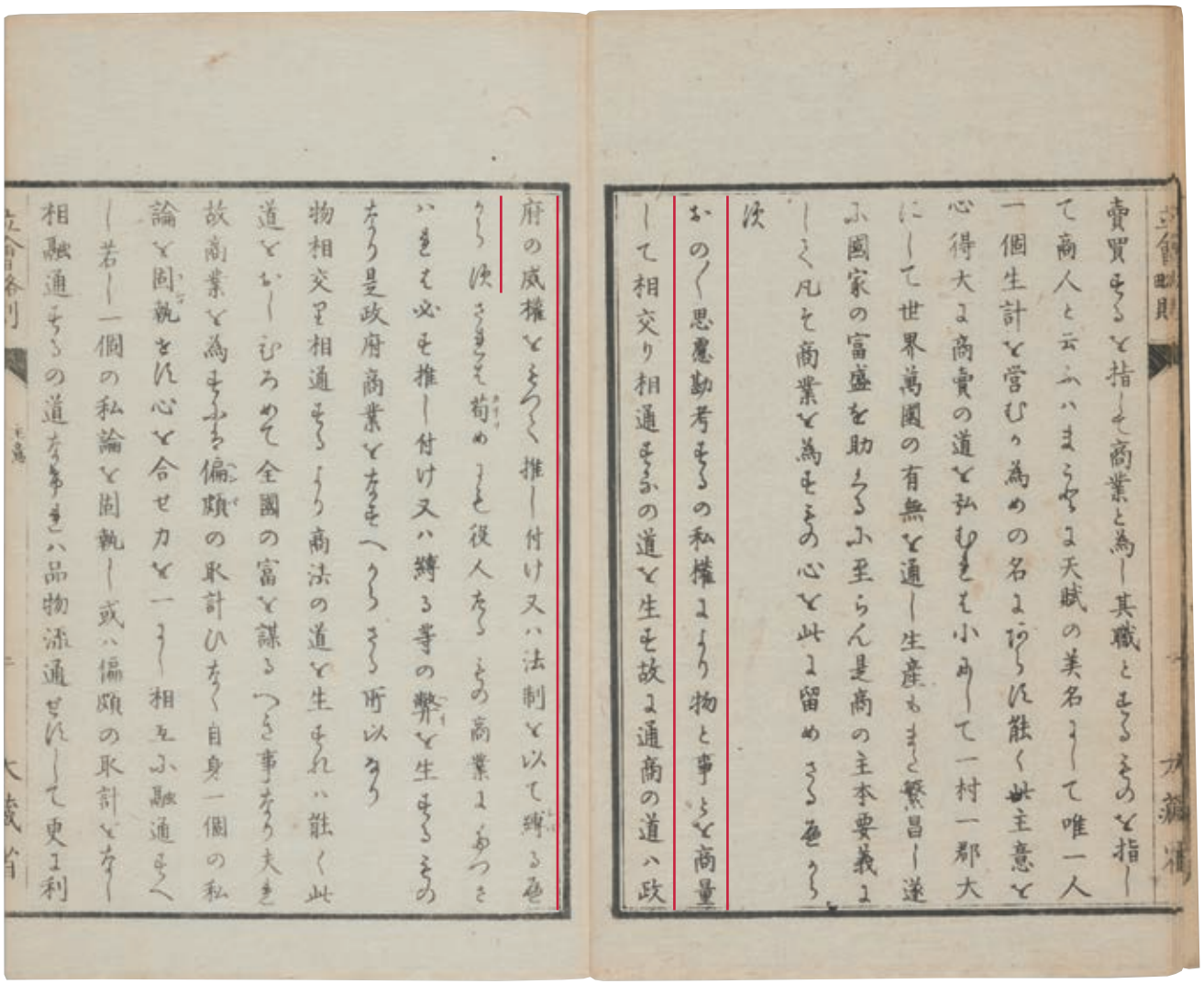
晩年のものとみられる肖像。
『近世名士写真　其2』近世名士写真頒布会　昭10
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3514947/71

渋沢栄一（1840～1931）

近代日本の指導的大実業家。現在の埼玉県深谷市の豪農の家に生まれ、当初は在野の攘夷派として活動するが、その後一橋家に仕官、さらには幕臣となった。慶応3(1867)年から約2年間にわたり、将軍徳川慶喜の弟昭武のパリ万国博覧会列席に随行し、近代的な技術・制度を実地に学ぶ。帰国後は、民部省、次いで大蔵省に出仕し、租税・金融・財政制度の確立に従事した。明治6(1873)年に大蔵省を退官した後は、第一国立銀行を設立して頭取を務めるとともに、抄紙会社（王子製紙会社）、大阪紡績会社、東京海上保険会社、日本郵船会社、東京株式取引所等多くの会社の設立に関与した。また、東京市養育院を設立して半世紀にわたり院長を務め、米国で排日世論が高まると関係改善に努めるなど、公益活動にも熱心であったことが知られている。

君主、芸術家や教育者といった文化人などが選定される例が多いようです。我が国でも、昭和59（1984）年発行の「D券」以降、文化人の肖像が定着してきました。今回の改刷で一万円券の顔に選ばれた実業家・渋沢栄一は、紙幣肖像としては、いささか珍しい部類に入るのではないでしょうか。なお、財務省広報誌『ファイナンス』は、選定理由について、「渋沢栄一氏は、東京証券取引所や東京商工会議所など生涯に渡り500社にも上る新会社を興す手助けをし、産業の創出に貢献している。現在の国の成長戦略に盛り込まれている新規ビジネスの創出に合致した内容だ」と述べています。[5]

日本銀行券は、その名のとおり日本銀行が発行する通貨ですが、[6]渋沢は日本銀行の創立に際して、株主となるなど浅からぬ縁があります。[7]それどころか、中央銀行制度を含めた我が国の銀行制度を構想した1人が、渋沢であったとさえ言えます。[8]その渋沢ですが、大正2（1913）年2月24日、高橋是清大蔵大臣から日本銀行総裁就任を懇請された際には、「宿志不可動」と固辞しています。[9]当時、我が国は輸入超過による正貨（金準備）の流出に苦しみ、同月20日に発足したばかりの第1次山本権兵衛内閣は、難局打開のため渋沢に白羽の矢を立



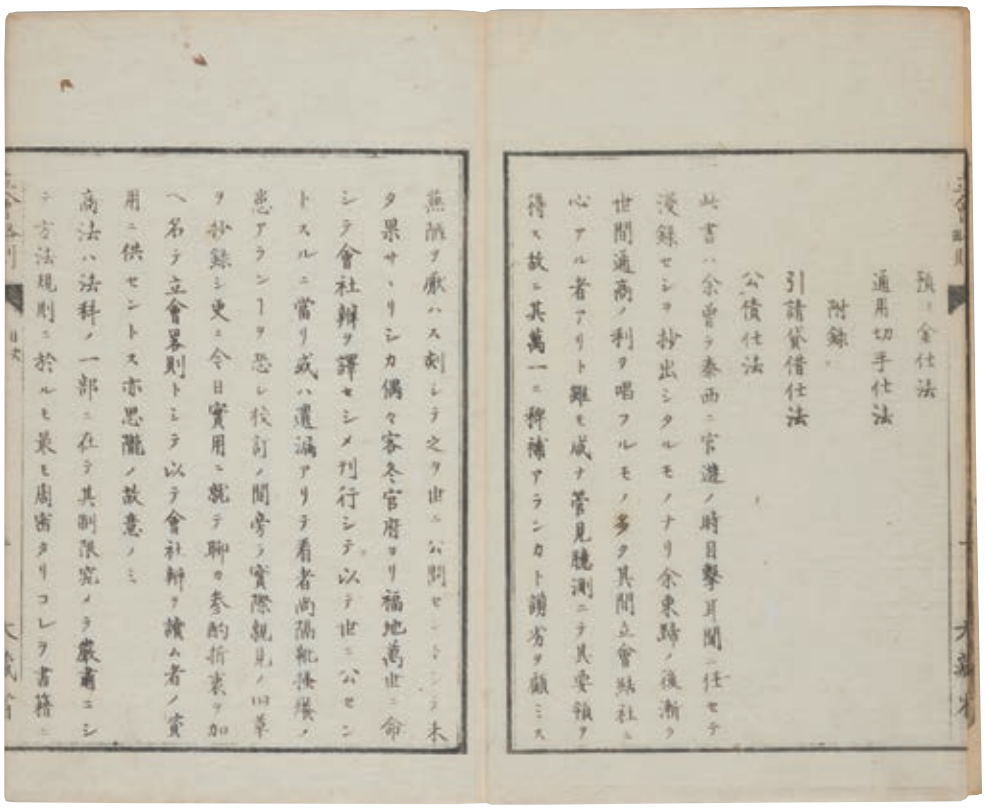
本文4頁で引用した『立会略則』冒頭部分の記述(傍線部)。

てたようです。「宿志不可動」とは、「かねてから思うところあって」ほどの意味でしょうか。渋沢の思いとは、いったいどのようなものだったのでしょうか。

それを知る手掛かりとなりそうなのが、大蔵省時代の渋沢が明治4(1871)年頃に執筆したとみられる『立会略則(りゅうかいりゃくそく)』です。「立会」とは、「会社設立」の意味であり、慶応3(1867)年から約2年にわたり、幕府使節団の会計係として徳川昭武に随行して欧州(主にフランス)に滞在した渋沢が、現地で見聞した「合本組織」、すなわち、政府の干渉を受けず、私権に基づき資本を拠出し合って設立する会社(株式会社)の実現方法を説いたものです。明治4(1871)年9月には、福地源一郎が西洋の経済書から抄訳した『会社弁』と合わせて、大蔵省官版として刊行・頒布されています。

日銀総裁ポストの行方は?

ちなみに、渋沢が辞退した日本銀行総裁に就任したのは、横浜正金銀行頭取であった三島弥太郎(NHK大河ドラマ「いだてん〜東京オリムピック噺〜」でおなじみの短距離走者・三島弥彦の兄)でした。実は、山本総理は同郷の三島に大蔵大臣を打診したものの、貴族院の会派・研究会の領袖であった三島は入閣を潔しとせず、日本銀行総裁であった高橋が入閣、三島がその後任に回ったという事情もあったようです。なお、三島総裁下では、第1次世界大戦の勃発により輸出が急伸し、正貨流出問題は終息しました。三島は、大戦終結後の恐慌を見ることなく、大正8(1919)年に在職のまま急死しますが、景気の黄金時代に際会した幸福な総裁であったと評されています[10]。


預ケ金仕法
通用切手仕法
附錄
引請貸借仕法
公債仕法
此書ハ余曾テ泰西ニ官遊ノ時目擊耳聞ニ任セテ漫錄セシヲ抄出シタルモノナリ余東歸ノ後漸ク世間通商ノ利ヲ唱フルモノ多ク其間立會社ニ心アル者アリト雖モ概ナ管見臆測ニテ其要領ヲ得ス故ニ其萬一ニ稗補アランカト諸省ヲ顧ミス
無識ヲ厭ハス剞劂シテ之ヲ世ニ公問セントシテ未タ果サヽリシカ偶々客冬官府ヨリ福地萬世ニ命シテ會社辯ヲ譯セシメ刊行シテ以テ世ニ公セントスルニ當リ或ハ遺漏アリテ看者尚隔靴搔癢ノ患アランヿヲ恐レ校訂ノ間愛ラ實際親見ノ四事ヲ抄錄シ更ニ今日實用ニ就テ聊カ參酌折衷ヲ加ヘ名テ立會略則トミテ以テ會社辯ヲ讀ム者ノ資用ニ供セントス亦思慮ノ故意ノミ
商法ハ法科ノ一部ニ在テ其制限究ノヲ嚴肅ニシテ方法規則ニ於ルモ兼モ周密タリコレヲ書籍ニ

渋沢による『立会略則』の序。『会社弁』と共に刊行されることとなった経緯等を記す。

当時の我が国では、商業の地位は低く、官尊民卑の根強い風潮が企業家による創意工夫を妨げていました。新政府は、半官半民の通商会社・為替会社を設立させ、産業振興を図りましたが、軌道に乗らず失敗に終わっています。『会社弁』・『立会略則』の刊行は、こうした背景の下で、民間主導による近代的な資本主義の確立を促すための施策であったと考えられます。[11]

『立会略則』は、「通商会社」と「為替会社」の2部立てとなっており、前者は株式会社の設立及び運営の仕組みを、後者は為替・貸付・預金という銀行業務の仕組みを、それぞれ解説しています。渋沢自身は、後年、「今から考へると成る程幼稚極まるもの」としていますが、他に適切な文献がなかった当時においては、画期的な手引となったことでしょう。[13]

前述のとおり渋沢は、幕末にフランスへ渡航していますが、現地で案内役を務めた銀行家・フロリヘラルド（Paul Fleury-Hérard）から、銀行や株式会社の仕組みなど資本主義全般の知識を学んだとされています。とりわけ、民間人たるフロリヘラルドが、政府の役人や軍人と対等に接する様子には感銘を受けたようで、後年になって自ら官を辞して実業に投じた真意も、官尊民卑の弊を正すことにあったと回想しています。[14]『立会略則』の冒頭部分には、「おのおの思慮勘考するの私権により、物と事とを商量して相交り相通するの道を生す、故に通商の道は政府の威権をもって推し付け、又は法制を以て縛るへからす」とあり、渋沢の志がうかがわれます。

「日本資本主義の父」とも称される渋沢栄一は、実業界にありながら「道徳経済合一説（論語算盤説）」を唱えて私利の追求にはしらず、東京市養育院等の社会事業や海外親善を通じた公益活動にも熱心であったことが知られています。しかし、明治6（1873）年に大蔵省を去った後は、公職を受けず、一民間経済人の立場から、産業の発展を通じて貢献することに強い信念をもっていたのです。

東京・大手町の一角に立つ渋沢の銅像。背後には、日本橋川をはさんで日本銀行本店がそびえる、日本資本主義を象徴するロケーション。

美肌のせい？

「僕はツイ何年か前迄は、よく澁澤の裸を見たものだが、その身體と云つたら、實に美事なものだ。僕は全盛時代の常陸山と比較して、何等遜色ないと思つた。唯、常陸山の皮膚は赤銅色だが、澁澤のは櫻色だ。白い肌に紅味がさして、燃える様に美しく、男でも見とれる位ひであつた。迚も八十歳の人とは思はれない。醫者が澁澤は普通人より二十年若いと云つてるさうだが、本當に若々しい。」（「僕の感心した人物　澁澤榮一さん（諸井恒平氏談）」『ダイヤモンド』18巻29号，1930.10.1, p.28.）

「E五千円券」に樋口一葉が採用された際には、容貌に凹凸がなく陰影が少ないことが紙幣肖像向きでないと指摘されましたが、昭和38（1963）年発行の「C千円券」に渋沢が落選した理由は、髭がないことのほか、そのあたりの事情もあったのかもしれません。

欧州滞在時の渋沢の日記が、いくつか知られている。そのうち『航西日記』は、渋沢日記と杉浦譲の備忘録を基に編集され、帰国後に公刊されている。パリ到着時（慶応3年3月7日）の記述には、「フロリヘラルト先導にて巴里都中央のカプシンヌ街なるガランドホテルに投宿せり」とある。なお、宿代は相当高かったらしく、会計係の渋沢は借家の手配に奔走することとなる。

『航西日記　巻之1』渋沢栄一（青淵）、杉浦靄人 著　耐寒同社　明4
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761061/2

『立会略則』と同時に刊行・頒布された『会社弁』には、渋沢が序を寄せている。

『会社弁』福地桜痴（源一郎）訳　大蔵省　明4.6序
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/800281/1（モノクロ画像）

1 財務省「新しい日本銀行券及び五百円貨幣を発行します」2019.4.9. < https://www.mof.go.jp/currency/bill/20190409.html>
2「（特集）新しい紙幣・硬貨発行の意義と最新技術―2004年以来約20年ぶりの刷新へ―」『ファイナンス』55巻3号，2019.6, pp.2-13.
3 日本銀行券は、発行時期によって記号（戦後はアルファベット）で分類されている。
4 植村峻『紙幣肖像の近現代史』吉川弘文館，2015, pp.224-228.
5 前掲注2
6 銀行券は、独立行政法人国立印刷局が製造した後、日本銀行が製造費用を支払って引き取り、金融機関が日本銀行当座預金を引き出す際に、日本銀行の窓口から銀行券を受け取る時点で発行される。
7『日本銀行百年史　第1巻』日本銀行，1982, pp.217-235.
8 明治維新に際して著しい財政難に陥った新政府は、太政官札という政府紙幣を発行するが、これは不換紙幣であり、政府の信用も十分でなかったことから、貨幣価値の下落に見舞われた。明治初年の大蔵省では、不換紙幣の整理が課題となり、米国式の分散型発券銀行制度を主張した伊藤博文と、英国式の中央銀行制度の導入を主張した吉田清成との間で、いわゆる銀行論争が闘わされる。当時の大蔵省で紙幣頭等を務めていた渋沢は、大蔵大輔の井上馨を助けて前者の説を採り、国立銀行制度が導入される。なお、後者の説は、後に日本銀行の創立に結実する（竜門社編『渋沢栄一伝記資料　第5巻』渋沢栄一伝記資料刊行会，1955, pp.192-221.）。
9 竜門社編『渋沢栄一伝記資料　第50巻』渋沢栄一伝記資料刊行会，1963, pp.289-291.
10 吉野俊彦（鈴木淑夫補論）『歴代日本銀行総裁論―日本金融政策史の研究―』講談社，2014, pp.141-159.
11 長幸男「日本企業理念の原点―『立会略則』をめぐって―」『法学セミナー増刊総合特集シリーズ』14号，1980.12, pp.40-48.
12 為替取引とは、隔地者間で直接金銭を輸送せずに資金を移動すること（送金）を指し、我が国の銀行法は、預金・貸付と合わせて銀行の固有業務と規定している。
13 岡田純夫編『渋沢翁は語る―其生立ち―』1932, pp.305-322.
14 白石喜太郎『渋沢栄一翁』刀江書院，1933, pp.74-79.

憲政資料室の新規公開資料から

国立国会図書館は、幕末・維新期から現代までの政治家、官僚、軍人らの所有していた個人文書（憲政資料約四一万点）を所蔵しています。このたび東京本館憲政資料室で新規に公開した資料をご紹介します。

憲政資料は主にご子孫などからの寄贈によって収集した資料から構成されており、整理や目録作成を経て一般に公開されています。この記事により、政治史をはじめ様々な分野の調査・研究を支える貴重なコレクションの魅力の一端を味わっていただければ幸いです。

憲政資料室のご案内（東京本館　本館4階）

幕末・維新期から現代にいたる政治家・官僚・軍人などが所蔵していた文書類を集めた「憲政資料」、第二次世界大戦終了後の連合国による日本占領に関する米国の公文書を中心に集めた「日本占領関係資料」、主に北米・南米への日本人移民に関する資料を集めた「日系移民関係資料」を扱っています。

憲政資料室の利用方法、今回紹介する資料を含む所蔵資料の概要については、リサーチ・ナビ「憲政資料室の所蔵資料」（https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/）をご覧ください。

憲政資料室

杉孫七郎関係文書（寄託・2019年追加分）

（四四点　令和元年九月公開）

明治期に長く宮内官僚として務めた杉孫七郎の文書です。当館では昭和四七（一九七二）年以来、杉孫七郎関係文書の寄託をご子孫から受けていますが、このたび、明治・大正期の日記を中心とする書類が新たに加わりました。

中でも目を引くのが、英照皇太后を追悼する文書の数々です。英照皇太后は旧名を九条夙子（くじょうあさこ）といい、孝明天皇の后となった人物です。杉は皇太后宮大夫の職で傍に仕えており、皇太后の崩御（明治三〇（一八九七）年正月一一日）から葬儀の運びについて日記に付箋付きで記しています。明治三〇（一八九七）年正月二六日の日記には、「御柩供奉被仰付　はてしなきなみたの露をはらひつゝ　かたるもかなしすきしみよかな」（写真1）とあり、冷静な記述に差し挟まれる和歌に深い哀悼の意が表れています。また、日記とは別に、女官たちに皇太后の遺徳を語った書面の草稿も遺されています（写真2）。

既寄託分の資料が幕末維新期の長州藩士という杉の一面を示すものであるのに対して、今回追加された資料は明治・大正期の宮中に仕える姿を伝えるものといえます。

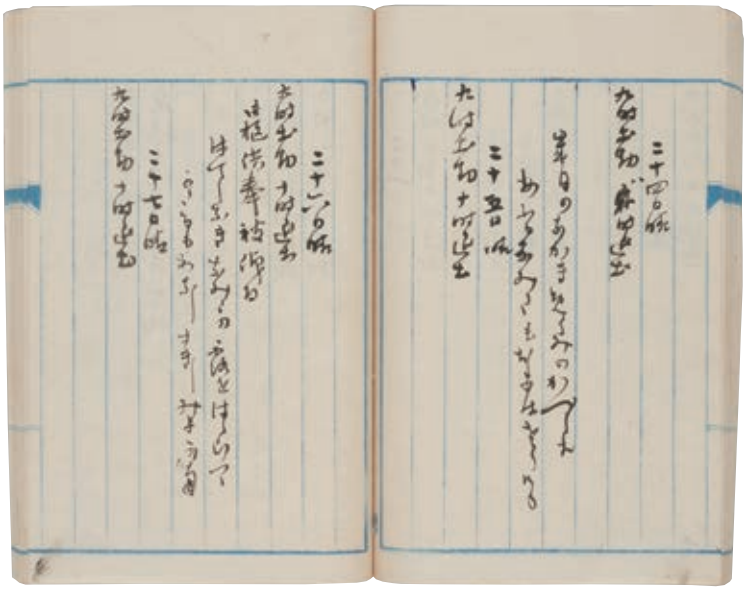


写真1　杉孫七郎の日記。明治30(1897)年1月26日の記述は、杉が英照皇太后出棺への供奉を命じられた旨を伝える。
<杉孫七郎関係文書（寄託）1010>

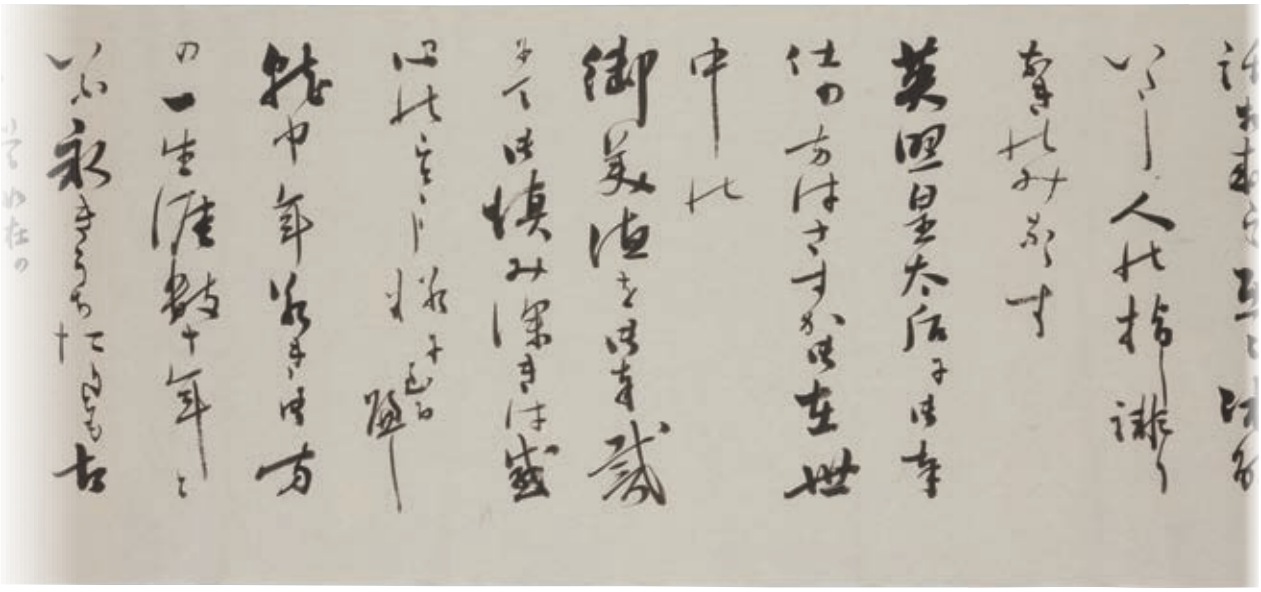


写真2　青山御所英照皇太后御霊前に於テ女官へ読聞セタル書面草稿
<杉孫七郎関係文書（寄託）1040-1>

杉孫七郎（1835-1920）

天保6(1835)年、山口生まれ。幕末期は長州藩の重職を担い、軍事面に手腕を発揮した。維新後、明治4(1871)年に宮内大丞に就いて以降は主に宮内官僚として従事。明治15(1882)年、特命全権公使としてハワイ皇帝戴冠式に参列。その後、皇太后宮大夫などを歴任。明治30(1897)年から枢密顧問官を務めた。大正9(1920)年死去。

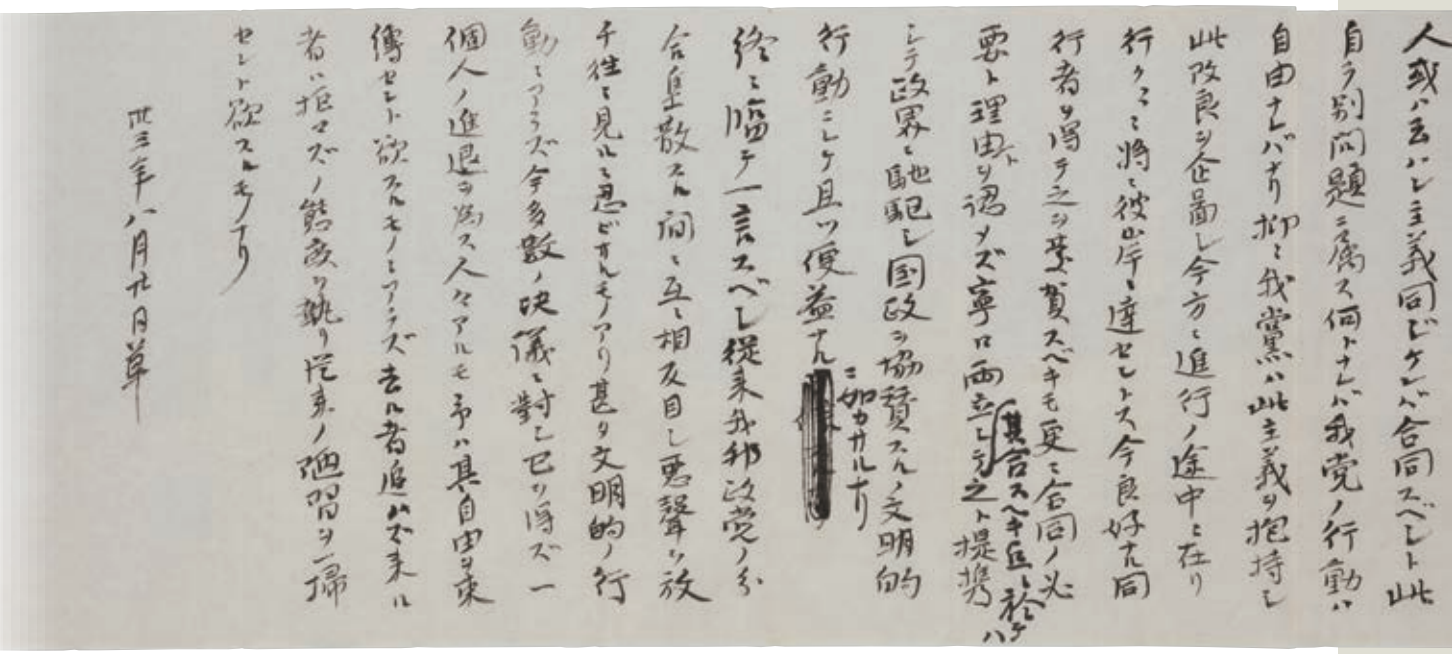


写真3　草案　明治33（1900）年8月20日　<佐々友房関係文書1038-2>

佐々友房（さっ ささともふさ）関係文書（第二次受入分）

（一一四点　令和元年六月公開）

「従来我邦政党ノ分合集散スル間ニ互ニ相反目シ悪声ヲ放チ往々見ルニ忍ビサルモノアリ」、政党の離合集散をめぐる当事者の言葉は、明治三三（一九〇〇）年八月二〇日の「草案」に出てきます。この文章は、国権の拡張を主張していた政治家である佐々友房を中心に、前年七月に結成した帝国党の常議員会（同年八月二二日）のために記されたようです。

この頃、維新の元勲伊藤博文は、新党結成を進めており、「実業優先」、「国権拡張」といった政策目標が近い帝国党に新党への合流、参加を誘っていました。この「草案」に署名はありませんが、同党の委員長である佐々の意を表しているもので、主義は同じでも独立性を保ちたいので合流しないと主張しています。同党内の動揺を抑えようとしている状況をうかがうことのできる資料です。この常議員会で、合流を否決し、伊藤博文にこの旨を伝えています（『東京朝日新聞』同年八月二三日）。

しかし、帝国党の議員一九名のうち五名が離反して伊藤を総裁とする立憲政友会（同年九月結成）に加わっています。その後帝国党は党勢も振るわず明治三八（一九〇五）年十二月二三日解散、大同倶楽部設立に際し合流しました。

佐々友房（1854-1906）

安政元（1854）年、熊本生まれ。明治10（1877）年西南戦争では西郷側に加わり負傷、懲役。明治14（1881）年に紫溟会を結成して、国権主義をとなえ、明治23（1890）年に熊本国権党副総理となり、同年衆議院議員に当選。政界では、自由党・改進党に対抗して実業振興と国権拡張を第一に主張し、政府与党の立場で尽力。国民協会、帝国党、大同倶楽部の中心人物。明治39（1906）年死去。

肖像写真の出典：『克堂佐々先生遺稿』（（昭和11）の口絵

佐々弘雄（ささひろお）関係文書

（二二九二点　令和元年六月公開）

佐々弘雄（政治評論家）は、昭和三（一九二八）年の九大事件[1]で九州帝国大学を辞職、のち東京朝日新聞社や熊本日日新聞社で活躍した人物です。

同文書には手帳、日記をはじめ、政治論説、大学教員（大内兵衛、河村又介ら）からの来簡など、多種多様な資料が含まれますが、この文書の個性的な側面の一つは、〝本〟をめぐる貴重なやり取りが垣間見えることです。

佐々は、東京帝国大学卒業後、第一次世界大戦後のインフレのさなかにあった独・仏に留学しました。佐々は度々本を購入して日本に送ります。

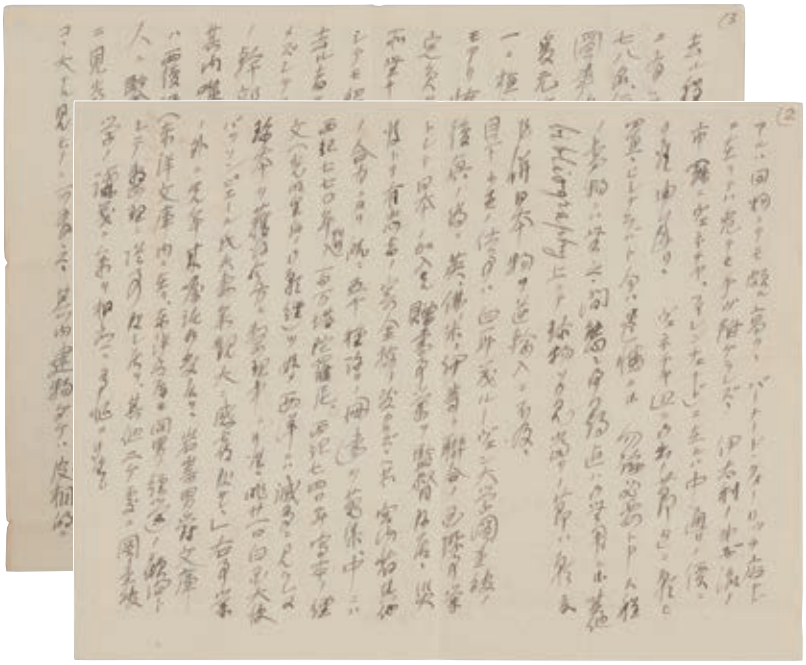
佐々留学中の日本は、関東大震災に見舞われ、同文書には、義父（妻・縫子の父）である和田万吉やその家族とのやり取りも含まれます。和田は、明治二九（一八九六）年東京帝国大学助教授を経て翌年附属図書館長に就任した人物で、日本における図書館学の草分けとして知られます。

関東大震災により、東京帝国大学附属図書館の蔵書は焼失しました。佐々の義妹（和田君）から在ベルリンの弘雄宛の手紙（大正一二（一九二三）年一一月）には、本郷にほど近い文京区西片町にいた万吉の火事当日の様子が描かれます。「東の方に上ったのは大学の火事で（中略）父は急いで行かれ」「夜お帰りになった父の顔を見ました時は思はず泪が出ました」「三十年の間一身を捧げて盡くして来た図書館を目の前に見ながら焼かねばならないのをどんなに残念に思った事でございませう」と悲痛さが滲む手紙です（資料番号四八-四）。和田はその後、責を負って同大を辞職しました。他方、大正一三（一九二四）年、和田は、第一次世界大戦中の攻撃により被災したベルギーのルーヴェン大学に対し、日本の文献をセレクトして贈る事業に携わりました（写真4）。

日欧に分かれていたゆえに詳細な文通の形で残された、家族、親族間の率直なやり取りが、奇しくもヨーロッパと日本の本をめぐる喪失と贈呈の歴史と重なります。

写真4　和田万吉書簡　佐々弘雄宛　大正13（1924）年5月22日
<佐々弘雄関係文書52-12>

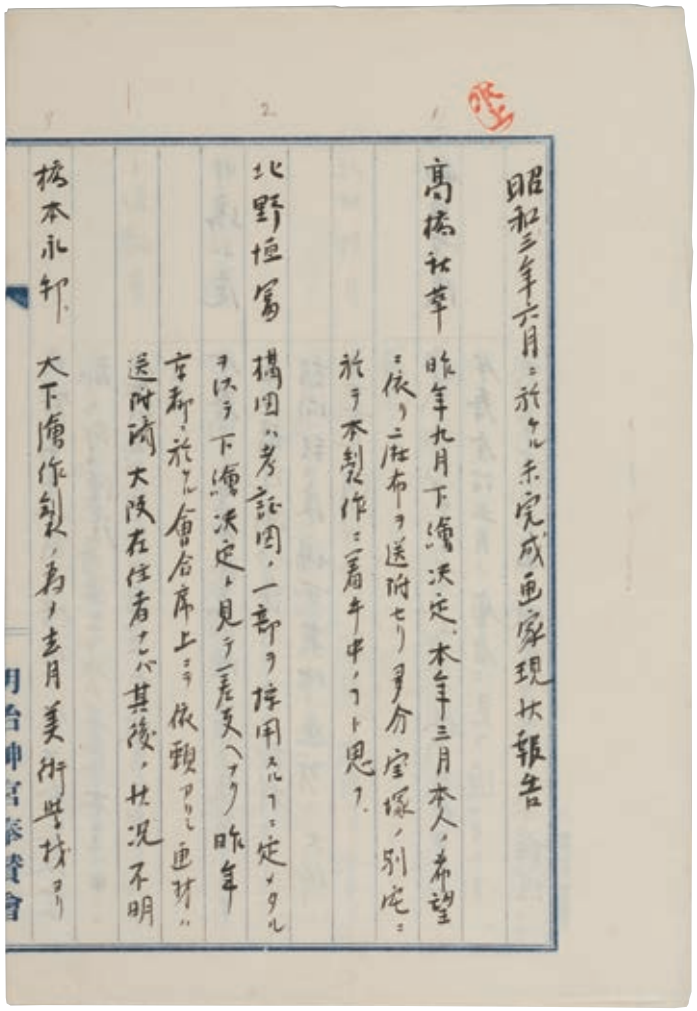
「目下小生ノ仕事ハ白耳義ルーヴェン大学図書館ノ復興ノ為ニ英、佛、米、伊等ト聯合ノ国際事業トシテ日本ノ加入セル贈書事業ヲ監督致居候」とあり、「宮内省其他ノ合力ニヨリ既ニ五千種余リ」を収集、「西紀七七〇年刊行ノ百万塔陀羅尼」「西紀七四〇年写本ノ経文（光明皇后ノ御願経）」などを集めたことを述べている。



佐々弘雄（1897-1948）

明治30（1897）年、熊本生まれ。佐々友房三男。大正9（1920）年東京帝大法学部卒、同助手。大正11（1922）年7月～大正13（1924）年11月欧米留学を経て、大正13（1924）年12月～昭和3（1928）年4月、九州帝大法文学部教授。九大事件により辞職。東京朝日新聞入社後、論説委員、論説室主幹を経て戦後、参議院議員（第1回総選挙当選）、昭和23（1948）年死去。佐々淳行氏（警察官僚）の父。

1　九大事件　三・一五事件（1928年の日本共産党員らの検挙事件）の影響下、九州帝国大学において、向坂逸郎、石浜知行、佐々弘雄の法文学部三教授らが大学を追われた事件。

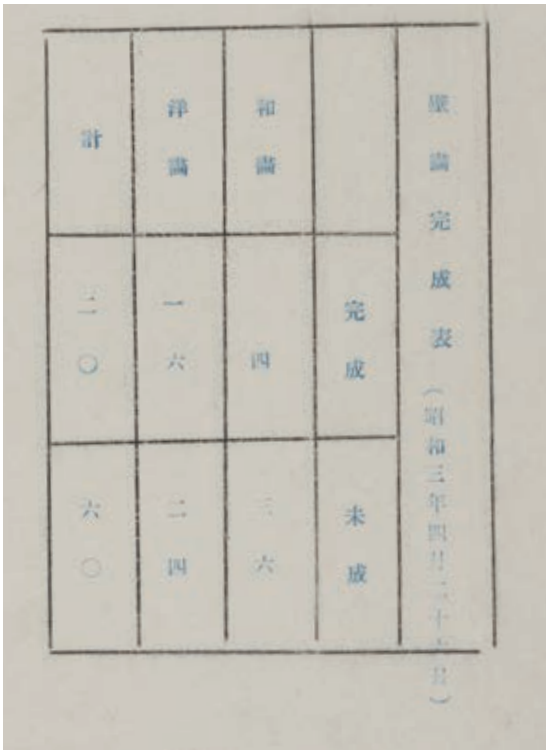


昭和三年六月ニ於ケル未完成画家現状報告

高橋秋華　昨年九月下絵決定、本年三月本人ノ希望ニ依リ二枚布ヲ送附セリ多分室隅ノ別室ニ於テ本製作ニ着手中ノヿト思フ

北野恒富　構図ハ考証図ノ一部ヲ採用スルヿニ定メタルヨシテ下絵決定ト見テ差支ヘナク昨年京都ニ於ル會合席上ニテ依頼アリシ画材ハ送附済　大阪在住者ナレバ其後ノ状況不明

橋本永邦　大下絵作製ノ為ノ去月美術学校ヨリ



壁画完成表（昭和三年四月二十六日）

	完成	未成
和画	四	三六
洋画	一六	二四
計	二〇	六〇

写真5　昭和三年六月ニ於ケル未完成画家現状報告
<阪谷芳郎関係文書（第二次受入分）5654>
（右）壁画完成表（昭和三年四月二十六日）
（左）昭和三年六月ニ於ケル未完成画家現状報告

阪谷芳郎（さかたによしろう）関係文書（第二次受入分）

（七八八点　平成三〇年九月公開）

阪谷芳郎関係文書は寄託を経て昭和五五（一九八〇）年に寄贈を受けた文書です。このたび四〇年弱の時を経て、ご子孫より新たな資料の寄贈を受けました。

阪谷芳郎は、貴族院議員、大蔵大臣などの傍ら、様々な団体の長を多数歴任しました。写真5はそのうちの一つ、明治神宮奉賛会副会長としての役回りから受領したと思われる記録です。

大正期、明治天皇・昭憲皇太后の事蹟を記念して、聖徳記念絵画館（明治神宮外苑）に新たに巨大な壁画の作成が計画されます。これには最終的に七六名の画家が関わりました。昭和三（一九二八）年四月二六日現在で、二〇点が完成、六〇点が未完という状況でした。岡田三郎助、鏑木清方、石井柏亭など錚々たる日本画・洋画家五四名から進捗状況を聞き取ったこの記録によると「案外早ク完成スベシ」といった画家がいる一方、「下絵ノ変更アリ」「今迄ノハ全部気ニ入ラズ途中ニテ筆ヲ捨テタリ」などと妥協を許さない画家もいます。大正末期から計画され、八〇点が出揃うのが昭和一一（一九三六）年四月までずれこんだという、約縦三m、横二・五～二・七mの壁画作成の苦労がしのばれる資料です。こうした資料だけではなく、約六〇〇通の書簡（安達峰一郎、渋沢栄一らからの来簡）や、ベルン経済会議（明治四四（一九一一）年）の書類、帝国飛行協会の関連資料なども含まれています。

阪谷芳郎（1863-1941）

文久3(1863)年岡山生まれ。阪谷朗廬の子、渋沢栄一の女婿。東京大学文学部卒、明治17(1884)年大蔵省入省、大蔵次官を経て明治39(1906)年1月～明治41(1908)年1月第1次西園寺内閣大蔵大臣、日露戦争時の財政経営・戦後の財政再建に手腕を発揮した。明治45(1912)年7月～ 大正4(1915)年2月東京市長。貴族院議員を経て、昭和16(1941)年死去。
肖像写真の出典：「近代日本人の肖像」（http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/454.html）

明治政治家書簡巻物（憲政資料室収集文書345）

（一巻（二〇通）、令和元年七月公開）

この巻物には、大山巌、佐野常民、青木周蔵など、薩長土肥の出身者を中心に、明治期の政治家の書簡二〇通が収められています。宛先には、いずれも農商務次官を務めた前田正名、斎藤修一郎の名前があり、書簡中にも実業界に関係した内容が散見します。

写真6はそのうちの一通で、消印から明治三一（一八九八）年のものとみられ、韓国釜山の伊集院彦吉（一等領事、一八九六年九月～一八九九年三月）から東京の前田正名に宛てた書簡です。

明治二九（一八九六）年以来、韓国では親露派内閣のもと、鉱山採掘権や鉄道敷設権がロシアやアメリカに譲渡されるなど、日本の地位は低下していました。しかし、明治三一（一八九八）年に入り、ロシアは大連・旅順の租借権獲得や東清鉄道の敷設などによって満州への勢力拡大を進める一方、朝鮮半島については商工業などにおける日本の発達を容認する方向に転換します。そして、明治三一（一八九八）年四月二五日に日露間で西・ローゼン協定[2]が結ばれました。

その翌月に書かれたのが写真6の書簡です。「露国態度一変、以来、我対韓策ハ大ニ好望之域ニ相進」という状況であり、韓国は「日本人経営之地トシテハ合当ノ場所」なので、「民業トシテ諸事経営」することを切望しています。特に前田は日本国内で地方産業振興運動を指導していた人物であり、そのような有力者が韓国を視察し、民業を誘導してもらえれば「我対韓策上大ニ便宜」と述べています。

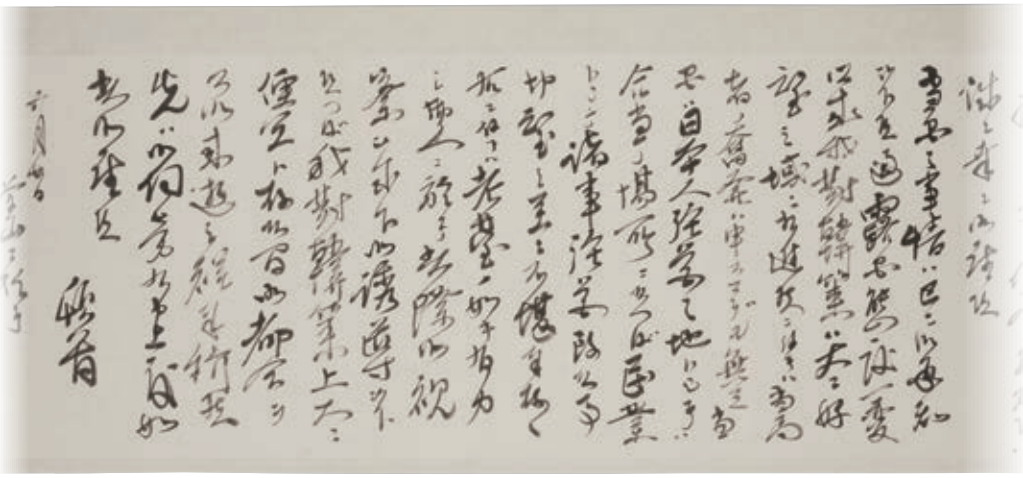


写真6　伊集院彦吉書簡 前田正名宛〔明治31（1898）年〕5月7日
<憲政資料室収集文書345>

前田正名（1850-1921）

嘉永3（1850）年、鹿児島生まれ。明治23（1890）年に農商務省次官に就任するも、同年陸奥宗光農商務相と対立して下野。以後全国を行脚し、地方産業振興運動や実業団体の組織化を推進、「布衣の農相」と評された。大正10（1921）年死去。

関連資料：前田正名関係文書（その1）・（その2）（憲政資料室所蔵）
肖像写真の出典：「近代日本人の肖像」（http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/430.html）

伊集院彦吉（1864-1924）

元治元（1864）年、鹿児島生まれ。明治23（1890）年、外務省入省。明治29（1896）年、釜山に一等領事として赴任する。後に清国駐箚特命全権公使として5年間、日露戦争後の日清交渉、辛亥革命及びその後の日中間外交の衝にあたる。大正8（1919）年にはパリ講和会議の全権委員を務めた。大正13（1924）年死去。

関連資料：伊集院彦吉関係文書（その1）・（その2）（憲政資料室所蔵）
肖像写真の出典：「近代日本人の肖像」（http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/564.html）

2　全3条からなり、第3条において、「露西亜帝国政府ハ韓国ニ於ケル日本ノ商業及工業ニ関スル企業ノ大ニ発達セルコト及同国居留日本国臣民ノ多数ナルコトヲ認ムルヲ以テ日韓両国間ニ於ケル商業上及工業上ノ関係ノ発達ヲ妨碍セサルヘシ」と定められた。（『日本外交文書 第31巻 第1冊』）

参謀本部管西局報告書類（杉山直矢関係資料）（憲政資料室収集文書1481）

（八九点　平成三〇年八月公開）

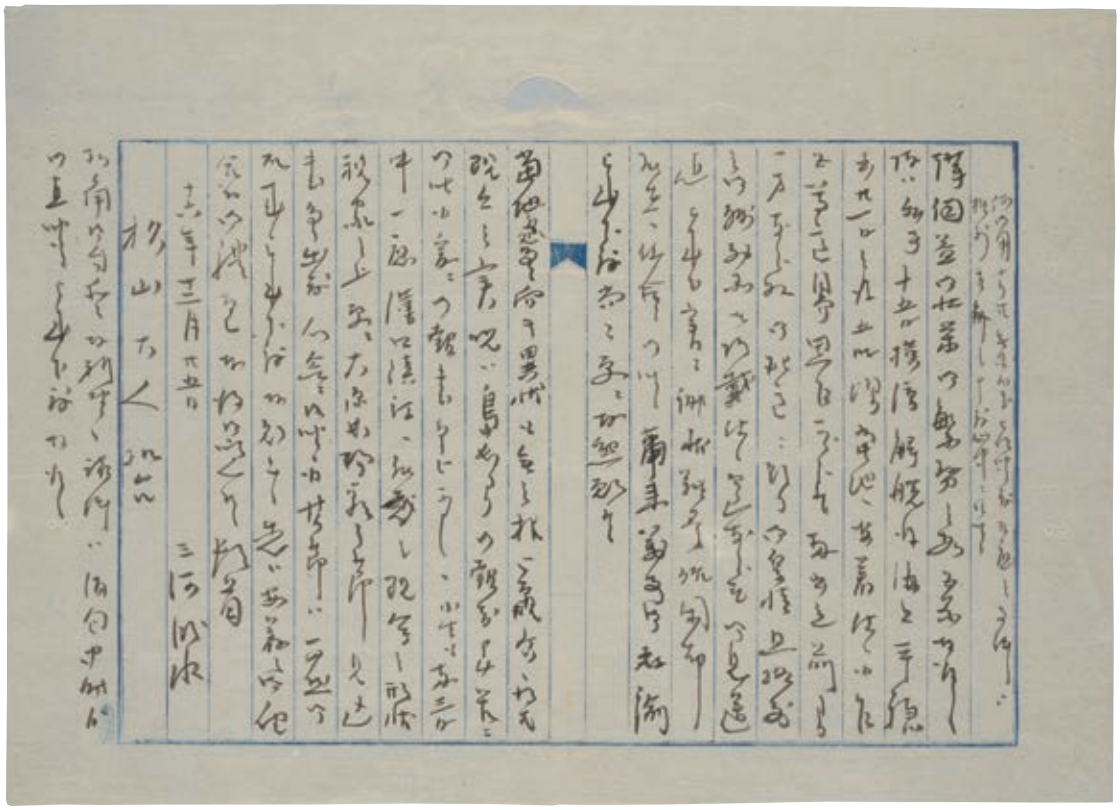
杉山直矢関係史料（憲政資料室収集文書348）

（六七点　令和元年七月公開）

この二つの史料は、諜報活動のため中国の漢口に派遣された陸軍将校伊集院兼雄が、現地から参謀本部管西局員の杉山直矢に宛てた報告書です。罫紙筆跡から、原文ではなく筆写したものと推測されます。両史料の差出人は「三河臥水」とありますが、これは伊集院の変名です。[3]

写真7の史料（明治一六（一八八三）年一二月二五日付）によりますと、一二月一五日に横浜を出立（出張を命じられた日の二日後）、二一日に上海に到着したのち、年末には揚子江を遡って内陸の調査に出発する予定であることが記されています。写真8の史料（明治一七（一八八四）年一月二七日付）によりますと、実際には明治一七年一月三日に上海（史料中の「申」とは上海の古い時代の呼び方）を立ったようですが、「必然自ラ奔走不致候而ハ迚モ現在非常ノ探知難仕」「長江筋水路陸路ノ飛脚ノ如キ者ニ変シ、各所潜行仕度」と孤軍奮闘している様子が窺われます。この時期、朝鮮では壬午軍乱・甲申政変、中国では清仏戦争と、東アジアの状勢は風雲急を告げており、日本陸軍としても情報収集に必死でした。

写真7　伊集院兼雄書簡　杉山直矢宛　明治16（1883）年12月25日
<参謀本部管西局報告書類（杉山直矢関係資料）（憲政資料室収集文書）1481-7>



3　大里浩秋「漢口楽善堂の歴史（上）」（『人文研究』155、2005）

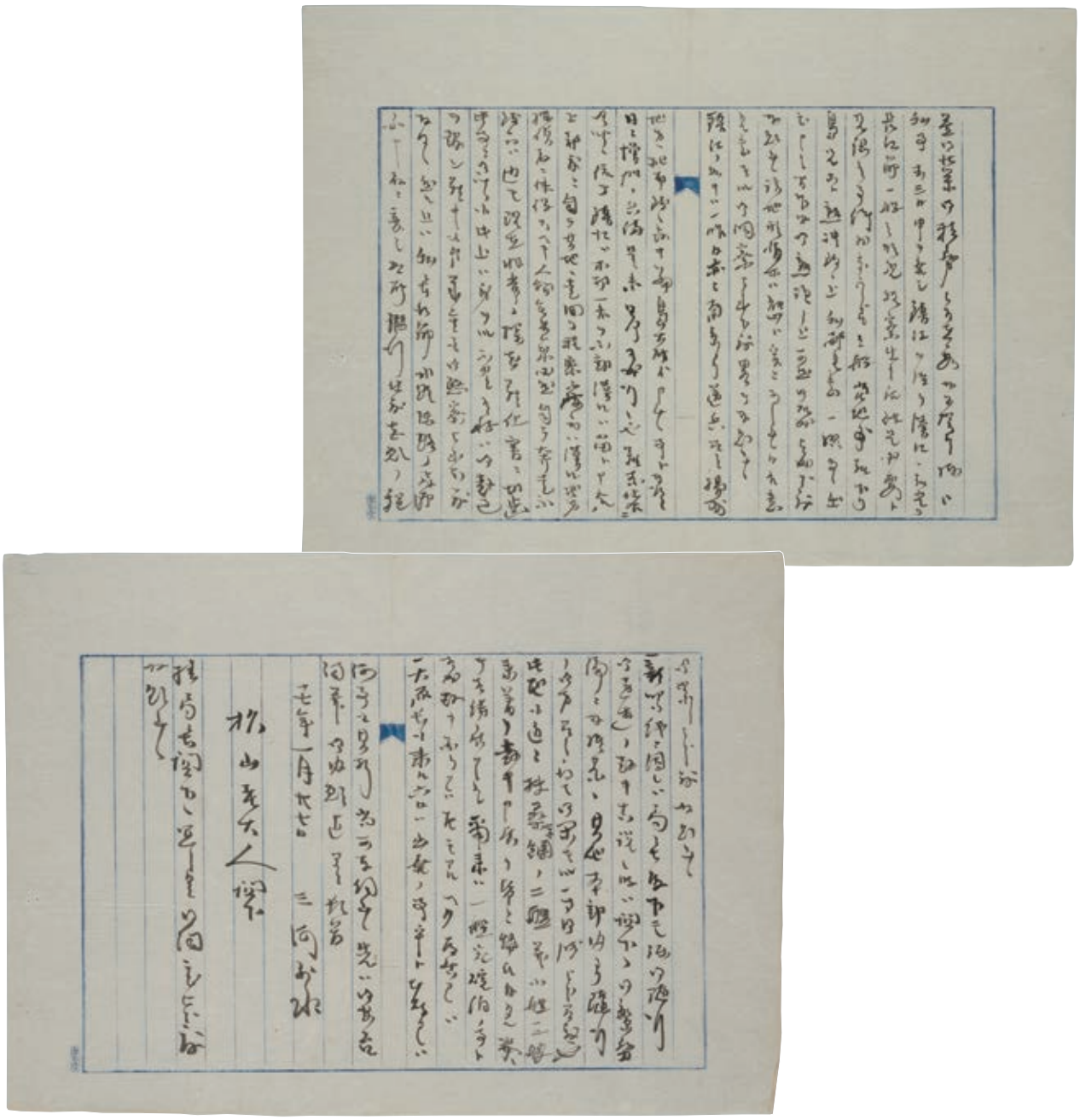


写真8　伊集院兼雄書簡　杉山直矢宛　明治17(1884)年1月27日
<杉山直矢関係史料（憲政資料室収集文書）348-7>

伊集院兼雄（1853-1904）

嘉永6(1853)年、鹿児島生まれ。戊辰戦争に参戦し、明治4(1871)年御親兵が組織された時に軍人となる。明治12(1879)年参謀本部出仕となりすぐに清国に派遣、牛荘を中心に満州南部を調査。明治15(1882)年帰国するが、翌年も清国に派遣され漢口を中心に活動、岸田吟香の支援で諜報活動の拠点として漢口楽善堂を開業する。明治18(1885)年工兵科研究のため欧米出張、帰国後は第1方面工役長、工兵第2大隊付、福岡連隊区司令官を歴任。工兵少佐。 明治37(1904)年死去。

杉山直矢（1850-1896）

嘉永3(1850)年、山口生まれ。明治5(1872)年陸軍に入り、明治12(1879)年頃に参謀本部管西局員となり諜報活動に従事、明治18(1885)年には参謀本部編纂課長となる。その後は歩兵第22連隊長、近衛歩兵第1連隊長を経て、日清戦争では下関兵站司令官を務める。少将。明治29(1896)年死去。

館内スコープ

何も起きないことが一番です

時折、館外の知人に「国立国会図書館で今、どんな仕事をしているの？」と聞かれると、少し考えて、「見回り」と答えます。勿論、それ以外にも仕事はあるのですが、今の自分の仕事で、最も重要かつ興味深い業務として挙げるとすれば、見回りになるのではないかと思います。

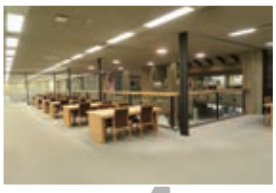
永田町の国立国会図書館東京本館には毎日約2千人の利用者が来館し、それぞれの時間を過ごします。ゼミナールの研究課題を調査する学生。会社の業務で関連業界の統計を収集するビジネスマン。本を手に取ることもなく、新館吹抜ホールに展示されている大きな日本画に見入る年配の女性。彼らは入館ゲートを通り、広大な1万9千㎡（サッカーグラウンド3個弱）の閲覧スペースに自分の居場所を求めます。

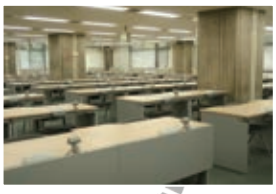
私はこの図書館で、人々が快適で安全に時間を過ごすことができるよう一日二回見回りをします。（広いので、ほかの職員や警備員も見回っています。）温度や湿度は適正か。閲覧室が騒がしくないか。利用の仕方が分からなくて困っている人がいないか。具合が悪い人がいないか。利用者同士で何かもめ事がないか。

見回りは時間を問わず、事務仕事が一段落したときに出発します。コースは概ね決まっています。まず新館ホールのインフォメーションカウンターを出発し、雑誌カウンター前から新館閲覧室へと進みます。途中、検索用端末で検索の仕方が分からない人がいれば検索方法を案内します。次に連絡通路を通り、本館ホールに向かいます。本館ホール中央にある図書カウンターを見ながら、本館ホールを周り、最も席数の多い第一閲覧室に向かいます。閲覧室内では利用者の集中をそがないように静かに巡回します。最近はパソコンを使いながら資料を閲覧する人も増えています。人が多いので、室温にも気を配ります。最後に人文総合情報室を右手に見ながら階段を上がり、本館3階の第二閲覧室へと向かいます。第二閲覧室は、パソコンやスマートフォンなどの機器は一切使用禁止です。入室中は電源も切らなければなりません。このため、第二閲覧室では、自ずと利用者が本と一対一で向き合うことになります。

実は私、この部屋の風景が一番好きです。机の上に本一冊。ノートも筆記用具もなし。椅子の上で背をまっすぐに伸ばし、一途に活字に視線を注ぐ学生。いつか古い白黒写真で見た、昔の図書館の閲覧室風景を思い起させてくれます。

（サービス運営課　航空旅行）





絵本に見る アートの100年

展示会 ―ダダからニュー・ペインティングまで

100 Years of Modern and Contemporary Art in Picture Books – From Dada to New Painting

1　2　3

前　期　2019年10月1日(火)―11月17日(日)

後　期　2019年11月19日(火)―2020年1月19日(日)

入場無料

会　場　国際子ども図書館 レンガ棟3階 本のミュージアム

開館時間　9時30分～17時

休 館 日　月曜日、国民の祝日・休日、年末年始、毎月第3水曜日（資料整理休館日）

会期途中で展示替えを行います。

https://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/tenji2019-03.html

画像左から

1『海と灯台の本』【Y18-N11-J135】
ウラジーミル・マヤコフスキー 文　ボリス・ポクロフスキー 絵　松谷さやか 訳　新教出版社　2010

2 Pro dva kvadrata : v 6ti postroĭkakh : suprematicheskiĭ skaz
（6つの構成による2つの正方形についてのシュプレマティスムのお話）【Y17-B4936】
Él Lisit͡skiĭ　Skify　1922

3『アンリくん、パリへ行く』【Y18-N12-J280】
ソール・バス 絵　レオノール・クライン 文　松浦弥太郎 訳　Pヴァイン・ブックス　2012

【】内は国立国会図書館請求記号。本稿において請求記号の記載があるものは、全て国際子ども図書館蔵。

国際子ども図書館では、10月1日から2020年1月19日まで、企画展「絵本に見るアートの100年―ダダからニュー・ペインティングまで」を開催しています。ここでは、この展示会の概要をご紹介します。

近年、絵本に対して、その視覚表現性に注目し、美術作品の一つとして探究する動きが活発になってきています。その流れを受け、本展示会では、主に20世紀における革新と創造に焦点を当て、美術の観点から国内外の絵本をご紹介します。20世紀初頭に起こったダダやシュルレアリスムに始まり、第二次世界大戦を経て現代に至るまでの芸術思潮と絵本の関わりについて取り上げます。

④『幸福の王子』【Y9-N07-H209】
オスカー・ワイルド 原作
建石修志 画　曽野綾子 訳
バジリコ　2006

ダダとシュルレアリスム

1916年、第一次世界大戦の最中、中立国スイスで芸術運動ダダが起こります。ダダは戦争を支えた当時の価値観や既成の芸術への反抗を掲げ、多くの共感者を得て欧米各国に広がりました。ダダの芸術家たちは、常識にとらわれず、時には物議を醸すような作品を数多く送り出しました。

この中で、ドイツを中心に活躍したクルト・シュヴィッタースやハンナ・ヘーヒらは、フォトモンタージュやタイポグラフィなどの技法を大胆に用いて、日常的なイメージを解体し、再構築する作品を数多く制作しました。分野を越え、多岐にわたる彼らの作品の中には、絵本も含まれています。

パリでダダの運動に参加したアンドレ・ブルトンらは、1920年代初めにシュルレアリスムを提唱しました。理性や合理性の統制から解放された、夢や狂気、無意識などの世界を通して、人間の本質に迫ろうとしました。そのため、シュルレアリスムでは、偶然性を重視する表現方法が多く用いられました。シュルレアリスムの運動は世界に広がり、時代を越えて影響を与え続けています。クリス・ヴァン・オールズバーグや建石修志を始め、現代の絵本の多くにもその影響を見ることができます。⬇資料④

絵本に見るアートの100年
―ダダからニュー・ペインティングまで
100 Years of Modern and Contemporary Art in Picture Books – From Dada to New Painting

ロシア・アヴァンギャルド

6 Почта（郵便）【Y17-B2711】
サムイル・マルシャーク 詩　ミハイル・ツェハノフスキー 絵　鴻野わか菜 訳　淡交社　2004
手紙が配達されるまでの過程をシンプルな絵で表現し、郵便の仕組みを紹介する一冊です。表紙は切手を模したデザインで、郵便物を運ぶ船や汽車が描かれています。

5 Багаж（荷物）【Y17-B2705】
サムイル・マルシャーク 詩　ウラジーミル・レーベジェフ 絵
鴻野わか菜 訳　淡交社　2004
ウラジーミル・レーベジェフは、ロシア・アヴァンギャルド絵本の傑作を数多く制作しました。

ロシア（ソヴィエト）では、1910年代から1930年代初めにかけて、ロシア革命の混乱時、新たな芸術の方向性を模索する中で前衛的な芸術運動（ロシア・アヴァンギャルド）が起こりました。絵本の分野では、鮮やかな色彩と大胆に抽象化した形を用いたアヴァンギャルド絵本が次々と刊行されました。↓資料1 5

1915年にカジミール・マレーヴィチが提唱したシュプレマティスムは、対象を画面上に再現することを否定し、線や形そのものに価値を見出しました。当時の革新的なアーティストであったエル・リシツキーは、シュプレマティスムの考え方を取り入れた絵本を制作しました。↓資料2

1920年代になると、リシツキーやウラジーミル・タトリンらに代表される構成主義が台頭します。芸術の実用性が重視され、印刷の分野では、読み手に効果的に訴える革新的な紙面デザインが生み出されました。

また、労働者が社会の主役とされたソヴィエトでは、労働や職業紹介についての絵本も数多く誕生しました。直線を効果的に用いた簡潔なデザインで、子どもたちに身近な職業が表されています。↓資料6

ギャラリートーク

11月17日（日）、11月24日（日）、12月8日（日）、12月15日（日）、2020年1月12日（日）、1月19日（日）

展示会担当職員が展示の見どころをご紹介します。

※いずれも14:00から30分程度。事前申込不要。当日は直接「本のミュージアム」へお越しください。

チェコ・アヴァンギャルド

1918年にチェコスロヴァキア共和国が誕生すると、シュルレアリスムなどヨーロッパ各地の新しい芸術運動が流入します。カレル・タイゲらにより1920年に結成された芸術家集団「デヴィエトシル」のメンバーを始めとするチェコの芸術家たちは、それらの運動に影響を受け、芸術を高尚なものと考える伝統的な価値観を否定し、日常生活に美的・詩的なものを取りこむことを目指しました。こうした動きは、チェコの絵本に鮮やかな色彩とシンプルな形態をもたらしました。⬇資料7

7『ダーシェンカ　あるいは子犬の生活』
カレル・チャペック 文・絵・写真
カレル・タイゲ 装丁　保川亜矢子 訳
メディアファクトリー（KADOKAWA）　1998
チェコ・アヴァンギャルドの中心人物カレル・タイゲが装丁を手がけた作品です。

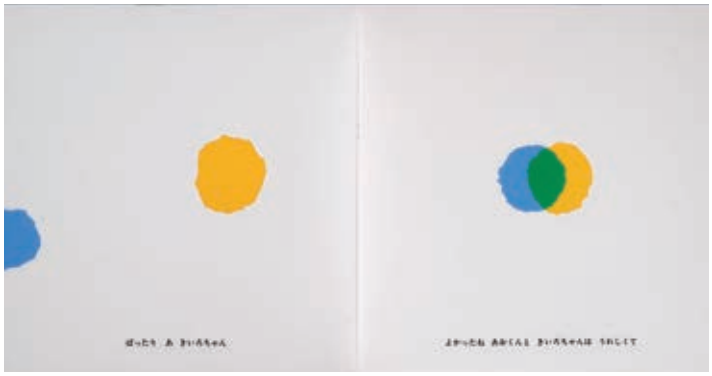
バウハウスとニュー・バウハウス

ドイツでは、1919年、工芸と芸術の統合を目指した美術工芸学校であるバウハウスが設立されました。ナチスの台頭により僅か14年間で閉校しますが、その理念を受け継ぎ、ニュー・バウハウスがアメリカに設立されました。美術、工芸、建築などの垣根を越えて総合性を追求したバウハウスの思想は、今日の美術、デザイン、そして絵本にも大きな影響を与えています。⬇資料8

8『ゆかいなかえる』【Y17-30】
ジュリエット・ケペシュ 文・絵
いしいももこ 訳　福音館書店　1964
ニュー・バウハウスで学んだジュリエット・ケペシュは、恩師でもあった夫ギオルギーがまとめ、バウハウス教育の集大成とみなされた視覚言語の理論を絵本の分野で実践しました。

グラフィック・デザインの可能性

美術の展開と歩調を合わせたデザイン界の革新は、絵本における視覚表現にも影響を及ぼしました。1940年頃、子どもの本をデザインするという考え方が登場し、1950年頃からはグラフィック・デザイナーたちが絵本制作に携わるようになります。視覚芸術の新しい考え方が絵本の世界に持ちこまれ、視覚的な表現でストーリー展開を図る試みが広がりました。グラフィック・デザイナーたちによる絵本には、読み手の想像力を引き出す仕掛けが多用されています。⬇資料3 9



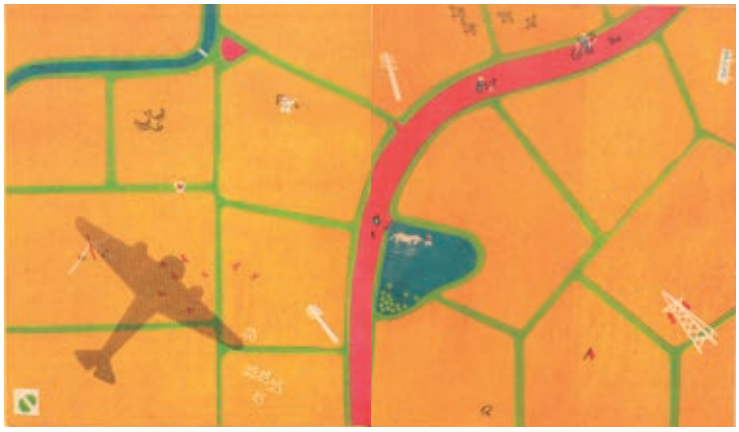
9『あおくんときいろちゃん』【Y17-8338】
レオ・レオーニ 作　藤田圭雄 訳　至光社　1981
青と黄を混ぜると緑になるという色の性質を活かし、ストーリーを視覚的に表現した一冊です。変幻自在に動き回る抽象的な2つの円が、読み手の想像力をかき立てます。

日本のモダニズム

日本でも、大正期に入ると前衛芸術の運動が起こります。1914年、抽象絵画の創始者とされるワシリー・カンディンスキーらの作品による木版画展が日本で開催され、恩地孝四郎などの若い版画家たちに影響を与えました。恩地はその後、創作版画を中心に抽象表現を追求し続けると同時に、絵本の挿絵や装丁も手がけ、数多くの傑作を生み出しました。

第一次世界大戦後には、ヨーロッパに留学する芸術家が増え、ヨーロッパの芸術運動が一挙に日本に伝わりました。その中の一人、村山知義は1922年にベルリンに留学し、ダダやロシアの構成主義などに触れ、刺激を受けます。帰国後、柳瀬正夢（別名・夏川八郎）らと新興芸術グループ「MAVO（マヴォ）」を結成し、日本の前衛美術を先導しました。⬇資料10 11

10『汽車』【Y1-N05-H327】
辻二郎 編　村山知義 画　東京社　1937



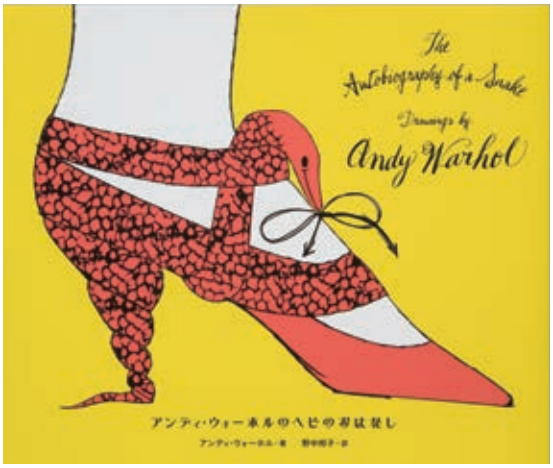
11『米』【Y1-N05-H328】
鈴木文助 編　夏川八郎 画　東京社　1937

第二次世界大戦後の美術の展開

第二次世界大戦が始まると、多くの芸術家がヨーロッパからアメリカへと亡命しました。芸術の中心がパリからニューヨークへと移り、美術における表現は多様化していきます。高級な文化とみなされてきた芸術は、急速に大衆文化との融合が進み、身近な存在となっていきました。アメリカでは、ポップ・アートが盛んになりました。**⬇資料⑫**

今日では、現代美術作家など、多方面の芸術家が絵本の分野に参入し、絵本における美術表現の可能性はますます広がっています。**⬇資料⑬**

⑬『ジャリおじさん』【Y18-9672】
おおたけしんろう えとぶん　福音館書店　1994
大竹伸朗は絵画、立体作品、コラージュなど、多岐にわたって活躍する現代美術作家です。大胆な絵と不思議な物語に大竹の魅力が詰まった一冊。



⑫『アンディ・ウォーホルのヘビのおはなし』
【Y18-N17-L117】
アンディ・ウォーホル 著　野中邦子 訳
河出書房新社　2017
アンディ・ウォーホルは、アメリカで活躍した、20世紀を代表するポップ・アーティストです。

【画像を紹介した以外の出展アーティスト】
クルト・シュヴィッタース、ジム・ダイン、サルバドール・ダリ、ヨゼフ・チャペック、ソニア・ドローネー、ジャン＝ミシェル・バスキア、ミンモ・パラディーノ、ハンナ・ヘーヒ、キース・ヘリング、デイヴィッド・ホックニー、イエラ・マリ、マリー・ローランサン、鬚嘔、赤瀬川原平、秋野不矩、粟津潔、宇野亞喜良、岡崎乾二郎、岡本太郎、恩地孝四郎、柏原えつとむ（槇ひろし）、香月泰男、草間彌生、黒田征太郎、小磯良平、鴻池朋子、古賀春江、駒井哲郎、駒形克己、杉浦非水、高松次郎、田名網敬一、谷川晃一、中西夏之、奈良美智、野見山暁治、早川重章、福沢一郎、堀文子、村上隆、元永定正、横尾忠則、吉原治良、李禹煥、脇田和　ほか多数

本展示会では、前期・後期あわせて約300点の資料を出展します。本稿で取り上げた資料以外にも、名だたるアーティストたちが手がけた絵本を展示し、絵本の世界における美術表現の広がりをご紹介します。様々な画家によって描かれた「不思議の国のアリス」、「赤ずきん」、「ピノキオ」の絵本を扱う特別コーナーもあります。

国際子ども図書館へのお越しをお待ちしています。

本屋にない本

カラフルな装丁に、目を奪われる。A5判、ソフトカバー、全ページフルカラーというポップな出で立ちは、横文字混じりの名前とともに「社史」というジャンルでは異色だ。

ニフティ株式会社は、1986年に株式会社エヌ・アイ・エフとして誕生した。当時日本ではパソコン通信が普及しておらず、翌年に同社が開始した「NIFTY-Serve」は、国産パソコン通信事業の草分けとなった。90年代に入り24時間サービスを開始、海外との時差を気にせずにサービスが受けられるようになる。後の阪神大震災では、パソコン通信が災害情報の共有にも使われた。

「NIFTY-Serve」は、90年代終わりにインターネット事業と統合、2006年にはパソコン通信の全サービスを終了した。ニフティはインターネット事業者としては後発であり、本書の言葉を借りれば「struggle」の時代を迎えることになる。

本書ではこうした出来事が、年代ごとに見開きで紹介されている。社員ひとりひとりの視点から語られている挿話も、その時代の雰囲気を活き活きと伝えている。例えば前述の「struggle」の時代にサービスを開始した「ココログ」については〈私の部屋にTシャツを着た若者2、3人が『ちょっと社長よいですか。お話があります』といって突然入ってきた。〉から始まる開設秘話が記事の中心である。こうした挿話により、「ニフティ」という会社が立体的に描き出される。

また本書には、ページの要所要所にQRコードが付与されている。現在はアクセスできないが、これは社史と同時期に公開されたWebコンテンツ「The History of Nifty」にリンク付けされており、各エピソードにコメントができた。読者参加型の社史というのも珍しい。

「世界を変えたければ、まず自分が変わらなければならない」――本書所載の、ある社員の言葉である。本書の後半には、こうした「現在」の社員たちの声を切り取ったものが集められている。本書のために、社の内外でのべ200名余りへ取材を行ったという。また、「ニフティ未来座談会」では、親と子どもほども年の差がある社員たちが、「ニフティ」という会社と、その未来への思いを語っている。

〈ニフティの30年は、ネットワークカルチャーの歴史であり、お客様との共創の歴史です。〉とは「社史編纂を振り返って」での言葉である。実際同社の歴史は、現代日本のIT受容の歴史とリンクしている。「そしてこれからも」という気概が、本書の随所から感じられる。

ストーリー性があって一気に読める、異色で斬新な社史。「本屋にない」のが残念になってしまった。

（千歳誠之）

The history of Nifty
our network culture
ニフティ30年史記念冊子

ニフティ株式会社ブランドデザイン部 編
ニフティ　2016.12　129p　21cm
<請求記号　DH22-L1275>

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

第21回　本の森を歩く

鉄のカーテンの隙間から

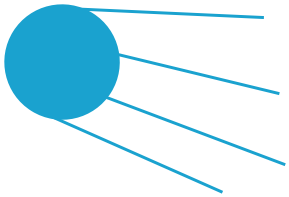
戦後のソ連関係資料あれこれ

冨田穰治

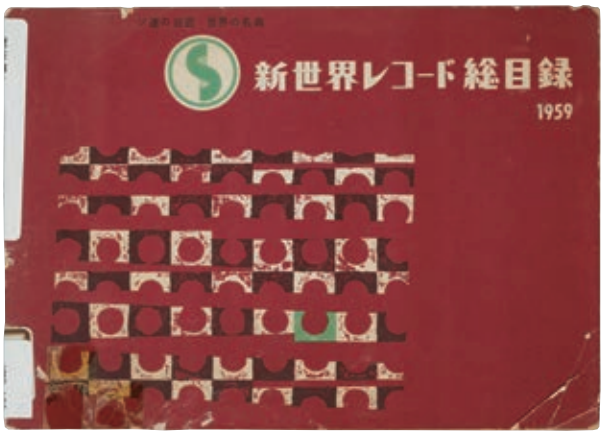
大正11（1922）年に成立したソビエト社会主義共和国連邦（以下「ソ連」）が、平成3（1991）年に終焉を迎えてから四半世紀以上が経過した。同時代の出来事として辛うじて覚えているに過ぎない世代の筆者としては、ソ連はほぼ歴史的な対象である。

それでもなお、ソ連時代の残り香を感じた場所が、東京・神田神保町にかつてあった「新世界レコード社」である。創業当初は、ソ連のレコード会社とのライセンス契約に基づいてLPレコードの日本国内制作を行っていたが、筆者が訪れた1990年代末は、ロシアなど旧ソ連諸国から輸入した、クラシック音楽からポピュラー音楽、民謡など幅広いジャンルの音楽CDやレコードを扱う専門店であった。他店では見ることのない珍しい商品が並んでいたのを覚えている。もともとはショスタコーヴィチやプロコフィエフなど主としてクラシック音楽のレア盤を求めて訪れた店だったが、ソ連時代のポピュラー音楽、ひいてはそこに投影されたソ連時代の生活や世相に興味をもつきっかけとなった。残念ながら平成19（2007）年に閉店している。

冷戦時代、米国と並ぶ超大国であったソ連への関心は総じて高かったが、一方でいわゆる「鉄のカーテン」の向こう側であり、流通する情報が乏しい国でもあった。本稿では、そのような時代のソ連の様相が垣間見える資料を、国立国会図書館所蔵のものから、いくつか紹介していきたい。

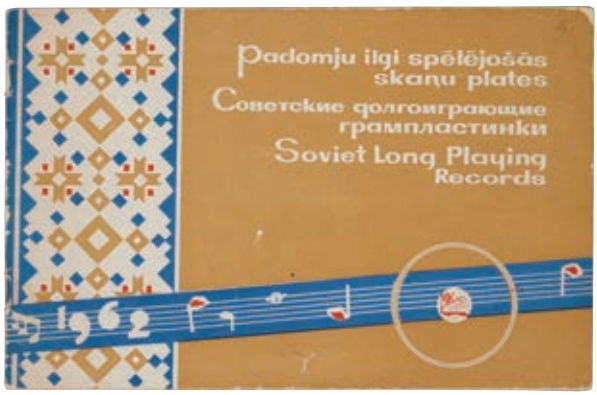


レコード目録



『新世界レコード総目録 1959』
［東京］［新世界レコード］［1958］<請求記号 YM2-163 >

本資料の冒頭には、株式会社新世界レコード社長で、当時、現職の衆議院議員（日本社会党）だった帆足計（ほあしけい）の序文が掲載されている。また、日ソ国交回復を実現した鳩山一郎元首相も、日ソ協会会長として推薦文を寄せている。



（上）*Padomju ilgi spēlējošās skaņu plates : Latvijas PSR mūzika un izpildītāji = Советские долгоиграющие грампластинки : латышская музыка и ее исполнители = Soviet long playing records : Latvian music and its performers*
Moscow : Mezhdunarodnaya kniga <請求記号 YM2-A28 >
（下）*Tarybinės ilgai grojančios plokštelės : Lietuvos TSR muzika ir atlikejai : katalogas = Советские долгоиграющие грампластинки : музыка и исполнители Литовской ССР : каталог = Soviet long playing records : music and performers of the Lithuanian S.S.R. : catalogue*
Moscow : Mezhdunarodnaya kniga 1962 < 請求記号 YM2-A25 >

ソ連における出版物の輸出入公団だった、メジドゥナロードナヤ・クニーガ（Международная книга）のカタログである。同公団はソ連の出版物の国外販売権を独占しており、日本で購入できる出版物は、同公団の目録に掲載されたものに限られていた。 本資料は、ラトビアとリトアニアの音楽と演奏家を扱ったもので、いずれも合唱曲が多いのが特徴である。ラトビア語かリトアニア語と、ロシア語、英語の3か国語で書かれている。

当館では、新世界レコードなど国内レーベルの目録のほか、ソ連本国で発行された、ラトビアとリトアニアの音楽のレコード目録も所蔵している。いずれも合唱曲が多い。

もともとバルト三国（エストニア、ラトビア、リトアニア）では合唱が盛んであり、バルト三国で開催される合唱と舞踊の大規模な祭典は、「バルト地方の歌謡・舞踏フェスティバル」として、UNESCO無形文化遺産となっている。

ソ連末期の民族運動のうち、バルト三国の独立運動では、多数の人々が集結するデモにおいても民謡や讃美歌などが広く歌われ、「歌う革命」と総称される。音楽家たちも民族主義的な詩に楽曲を乗せて積極的に創作し、民衆の独立への意識を高揚させた。

来日公演パンフレット

音楽と言えば、労音（全国勤労者音楽協議会連絡会議）や「うたごえ運動」といった戦後日本の音楽文化運動ではロシア民謡や、スターリンが進めていた植林事業を称えるオラトリオ『森の歌』（ショスタコーヴィチ作曲）がしばしば取り上げられるなど、ソ連の音楽への関心が高かった。

また、さまざまな団体の招聘によりバレエや演劇、サーカスの来日公演も多数行われた。ここでは、音楽・舞踊評論家である蘆原英了のコレクションから、来日公演のパンフレットを紹介する。

『レニングラードバレエ特別公演　都体育館』
［東京］［読売新聞社，アートフレンドアソシエーション］1960
<請求記号 VA251-1614 >

レニングラードバレエ団は、正式名称キーロフ記念レニングラード国立オペラ・バレエ劇場バレエ団。1783 年にサンクトペテルブルク（ソ連時代はレニングラード）で創立されたこの劇場は、ソ連崩壊後の平成 4（1992）年に旧称のマリインスキー劇場に復した。

本資料は昭和 35（1960）年 7 月 15 日に東京都体育館（現在の東京体育館）で、日ソ協会会員を対象に行われた「特別大衆公演」のパンフレット 。6 月に行われた東京宝塚劇場での公演と比べ、入場料が低廉であった。 招聘元のアート・フレンド・アソシエーションは、「赤い呼び屋」として名を馳せた神彰が経営していたものである。

『ソ連国立モイセーエフ民族舞踊団 新宿コマ劇場［他］』
［東京］［読売新聞社，日本国際芸術協会］1959
<請求記号 VA251-1275 >

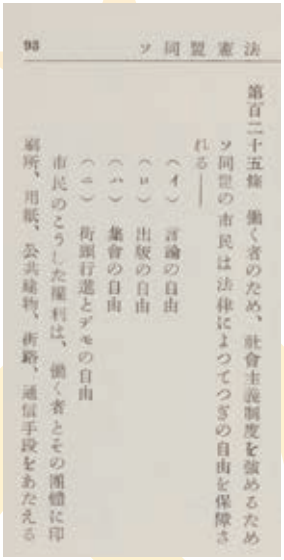
モイセーエフ舞踊団は、イーゴリ・モイセーエフが昭和 12（1937）年に創立した、ソ連各地の民族舞踊を紹介する舞踊団体である。現在でも、モイセーエフ記念国立アカデミー民族舞踊団として活動を継続している。

本資料は昭和 34（1959）年 9 月から 11 月に東京、名古屋、宝塚で行われた公演のパンフレット。蘆原英了も寄稿している。

憲法

ソ連における文化、芸術は、あくまで国の政策に合致している必要があった。なぜなら、あらゆる重要産業部門が国有化され、文化や芸術、スポーツなども国家事業とされたソ連の体制のもとでは、建国の大義である共産主義イデオロギーに反する言論や出版は認められなかったからである。

スターリン独裁体制下で制定された昭和11（1936）年のソ連憲法においては、第125条で言論の自由や出版の自由が条文上は保障されていたが、社会主義制度の強化等の目的に従うこと、法律の範囲内という留保がついていた。



『ソヴエト社會主義共和國同盟憲法 根本法』
モスクワ　外國語圖書出版所　1956 <請求記号 CR5-212-M1 >

本資料の扉には、1936 年憲法（スターリン憲法）を「ソ同盟第四次最高ソヴエト第四總會で改正・追加されたもの」である旨が記されている。

文学作品

ソ連における検閲が、世界的に物議を醸したこともある。

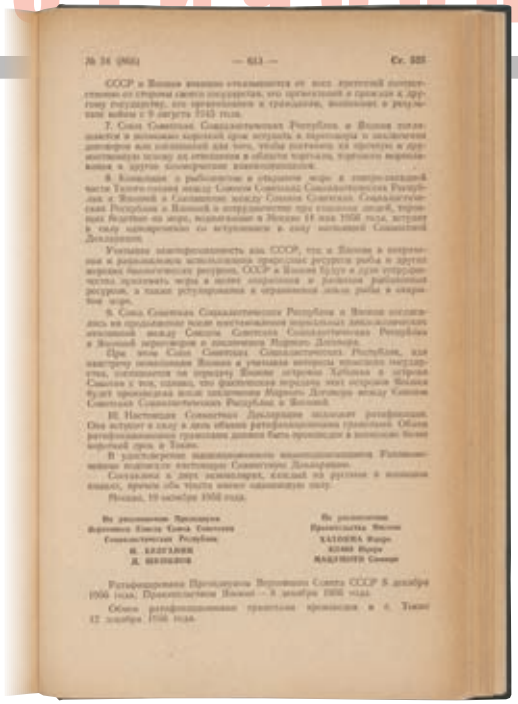
昭和32（1957）年に、パステルナークの長編小説『ドクトル・ジバゴ』は、ソ連国内で出版を許されぬままイタリアで出版された。昭和33（1958）年10月23日には、パステルナークのノーベル文学賞授賞が決定したが、ソ連国内での激しい批判にさらされて、受賞辞退を余儀なくされた。一方で、昭和40（1965）年には、『アラビアのロレンス』で名高いイギリスのデヴィッド・リーン監督によって映画化されるなど西側陣営では広く受容された。

また、昭和45（1970）年にノーベル文学賞を受賞したソルジェニーツィンは、公然と検閲を批判していた。『収容所群島』をフランスで出版したことがきっかけとなり、昭和49（1974）年には西ドイツへ国外追放となった。

『ドクトル・ジバゴ 第１部』
パステルナーク著　原子林二郎 訳
東京　時事通信社　1959
<請求記号 983-cP29d-H >

『ドクトル・ジバゴ』は、ロシア革命を背景として、主人公の医師ジバゴの波乱の生涯を描いた物語で、社会主義への幻滅が描かれていることが反革命とみなされた。時事通信社の記者である原子林二郎による翻訳は、パステルナークのノーベル文学賞受賞決定直後の昭和 33（1958）年 11 月 8 日号から『世界週報』に連載され、翌年には単行本が出版された（左画像）。単行本の挿画は奈良岡正夫。

истических Республик



公報

日本とソ連の国交が回復したのは、昭和31（1956）年12月である。これには国際連合加盟と密接な関係がある。

昭和27（1952）年6月に、日本は国際連合に加盟を申請したが、同年9月の国際連合安全保障理事会で、ソ連の拒否権発動により、日本の加盟申請が否決された。ソ連との国交回復なくして日本の国際連合加盟は実現しないことから、日ソ国交回復交渉が進められた。

そしてついに、昭和31（1956）年12月12日に発効した日ソ共同宣言で、日ソ戦争状態終了、日本の国際連合加盟へのソ連の支持などが約定された。これによって同年12月18日の国際連合総会で、日本の加盟が実現した。

Ведомости Верховного Совета СССР
1956年24号（通号866号） 1956年12月21日＜請求記号 CR5-2-1＞

ソ連の最高国家権力機関で、唯一の立法機関であったソ連最高会議の公報。掲載部分は、昭和31（1956）年12月12日に発効した日ソ共同宣言の末尾で、鳩山一郎、河野一郎、松本俊一、ブルガーニン、シェピーロフの署名が見られる。

新聞

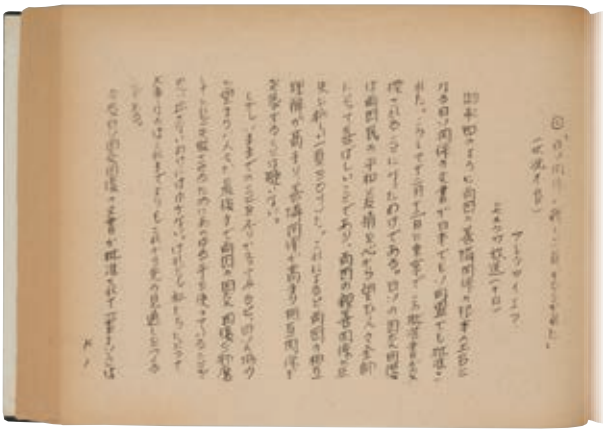
日ソ国交回復後も、米ソの核ミサイル競争や昭和35（1960）年のU-2型機撃墜事件、昭和37（1962）年のキューバ危機などにより冷戦構造は激化したため、「西側陣営」の一員である日本では依然としてソ連の情報を得る手段は限られていた。その乏しい情報も、ほとんどはソ連政府の公式見解を反映したものだった。ソ連のマスメディアは国営であり、ソ連共産党機関紙であった『プラウダ』（右）とソ連政府機関紙であった『イズベスチヤ』（左）が代表的な新聞だった。

Правда 1953年3月6日 65号（通号19633号）
＜請求記号 Z92-23＞

スターリンの訃報を伝える、昭和28（1953）年3月6日付の『プラウダ』1面。紙面全体に黒い縁取りがされているのが異例である。

日本で受信した ラジオ

ソ連の海外向けラジオ放送の「モスクワ放送」も、ソ連の政治的立場や公式発表を伝えるものとして注目されていた。昭和21（1946）年に外務省から財団法人として分離独立したラヂオプレスは、「モスクワ放送」など、情報が乏しいソ連や中国、北朝鮮のラジオ、テレビ、通信社電を受信し、重要なニュースや情報を翻訳したうえで配信しており、現在もオシント機関（オープン・ソース・インテリジェンス機関、公開情報をもとにした情報収集を行う機関）として活動を継続している。



「モスクワ　日ソ関係に新しい一頁が開かれた / アレクセーエフ / K1 ～ K4」『RP 資料解説版 』（488）東京　ラヂオプレス（RP）通信社
<請求記号 Z051.4-R4 >

日ソ共同宣言を受けての「モスクワ放送」の論評を紹介する記事。謄写版（ガリ版）印刷によるものであろう。

СОВЕТСКИЙ ЧЕЛОВЕК В КОСМОСЕ!

ЮРИЙ ГАГАРИН: ПРОШУ ДОЛОЖИТЬ ПАРТИИ И ПРАВИТЕЛЬСТВУ И ЛИЧНО НИКИТЕ СЕРГЕЕВИЧУ ХРУЩЕВУ, ЧТО ПРИЗЕМЛЕНИЕ ПРОШЛО НОРМАЛЬНО. ЧУВСТВУЮ СЕБЯ ХОРОШО

ВЕЛИЧАЙШАЯ ПОБЕДА НАШЕГО СТРОЯ, НАШЕЙ НАУКИ, НАШЕЙ ТЕХНИКИ, НАШЕГО МУЖЕСТВА

ИЗВЕСТИЯ

СОВЕТОВ ДЕПУТАТОВ ТРУДЯЩИХСЯ СССР

СОВЕТСКОМУ КОСМОНАВТУ, ВПЕРВЫЕ В МИРЕ СОВЕРШИВШЕМУ КОСМИЧЕСКИЙ ПОЛЕТ

майору Гагарину Юрию Алексеевичу

РЕПОРТАЖ С МЕСТА ПРИЗЕМЛЕНИЯ

О ПЕРВОМ В МИРЕ ПОЛЕТЕ ЧЕЛОВЕКА В КОСМИЧЕСКОЕ ПРОСТРАНСТВО

Известия　昭和 36（1961）年 4 月 12 日　88 号（通号 13634 号）
Москва : Газета Известия <請求記号 Z92-22 >

ガガーリンによる人類初の有人宇宙飛行を伝える、昭和 36（1961）年 4 月 12 日付の『イズベスチヤ』1 面である。紙面上部に赤字で、СОВЕТСКИЙ ЧЕЛОВЕК В КОСМОСЕ!（宇宙にソビエト人）と大書されているほか、題字も右側に詰めているなど、通常のレイアウトとは異なっている。なお、2 面には、「地球は青かった」という有名なセリフの原型と思われる Небо очень и очень темное, а Земля голубоватая.（空は非常に、非常に暗く、地球は青みがかっている）との一文が掲載されている。

対外宣伝出版物

ソ連では対外宣伝のための出版物が数多く出版されていた。その代表的な存在が、外国語文献（日本語を含む）の刊行を専門とするプログレス出版所の書籍や、ソ連大使館が編集する雑誌である。

特に雑誌は、写真を多用してグラフィカルに、ソ連の産業や文化の発展、科学技術やソ連の日常生活などを、親しみやすく紹介した。科学技術の中でも特に宇宙開発は、世界初の人工衛星スプートニク1号や人類初の宇宙飛行に成功したガガーリン、女性初の宇宙飛行士テレシコワなど、日本でも関心が高いテーマだった。

『モスクワ』　サウシキン 著　モスクワ　プログレス出版所　1966
<請求記号 293.8-cS25m >

観光案内というよりは、商工業や学術文化の発展ぶりをアピールするもの。

『ソビエト同盟』　ナウカ株式会社［編］　東京　ナウカ
<請求記号 Z8-352 >

93 号（1957 年 12 月）の標題紙。この号のカラー表紙は革命 40 周年をたたえる絵。

1955 年創刊、1958 年に『ソビエトグラフ』に改題、1990 年 12 月終刊。各国語で刊行された。ロシア書籍の輸入・販売を取り扱うナウカ株式会社が発行していた。

日本語版編集長だった川越史郎は、学徒出陣で満州に出征し、シベリア抑留の後にソ連に帰化した。 川越史郎の子息セルゲイ・カワゴエは、ソ連の人気ロックバンド「マシーナ・ヴレーメニ」（Машина времени）のメンバーとして知られた。

『今日のソ連邦』　在日ソ連大使館広報部 編　東京　新時代社 <請求記号 Z8-215 >

1958 年創刊、1991 年 1 月終刊。ソ連大使館が編集。月 2 回刊。日ソ友好に関する記事も多い。

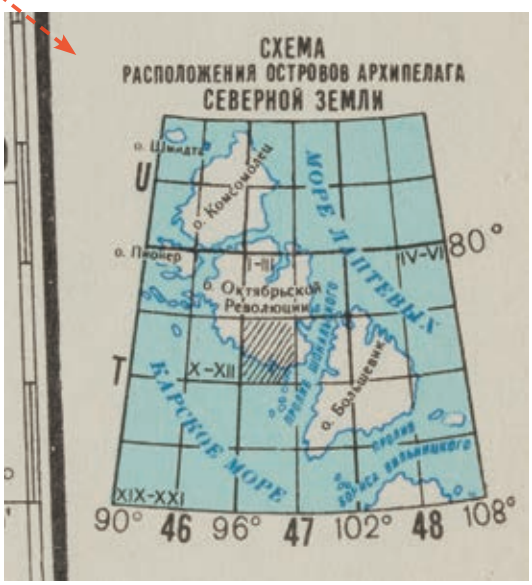
掲載箇所は、2 号（1958 年 5 月）に掲載された、第 1 回のチャイコフスキー国際コンクールを紹介した記事。アメリカ人のヴァン・クライバーンが優勝したが、扱いが小さい。これは、クライバーンが、アメリカの雑誌 *TIME* の同年 5 月 19 日号で、"THE TEXAN WHO CONQUERED RUSSIA"（ロシアを征服したテキサス州民）として表紙を飾ったのとは対照的である。

1961 年 4 月　臨時増刊「宇宙への道はひらかれた」
ガガーリンの宇宙飛行を特集した号。

地図

ソ連の約2240万km²に及ぶ面積は、地球の全陸地面積の6分の1弱を占め、アメリカ合衆国の約2.4倍、日本の約60倍に相当した。

この広大な国土を実感するのが、旧ソ連軍参謀本部が作製した20万分の1地形図である。20万分の1という縮尺では、地図上の1cmは実際の2kmに相当するが、これでもソ連全土をカバーするには約4000面を要する。ちなみに、国土地理院が作製する同縮尺の地図は、日本全国を130面でカバーしている。



M. Свердлова (Северная Земля) [cartographic material] ([Map of the USSR] ; T-47-7,8,9)
<請求記号 YG1-R5-20.0-T-47-3 >

タイミル半島北方の北極海に浮かぶセヴェルナヤ・ゼムリャ諸島の 20 万分の 1 地形図であり、十月革命島 [Остров Октябрьской Революции] の南部にあるスヴェルドロフ岬 [Мыса Свердлова] 周辺を描いている。この島の周囲には、共産主義青年同盟員を意味するコムソモレツ [Остров Комсомолец] 島や少年団に由来するピオネール [Остров Пионер] 島、ロシア社会民主労働党のうちレーニンが率いた左翼多数派に由来するボリシェヴィキ [Остров Большевик] 島など、ソ連らしい地名が並んでいる。

【参考文献】
◆株式会社新世界レコード社ウェブサイト（Internet Archive, 2007 年 6 月 23 日）
https://web.archive.org/web/20070623181829/http://www.shinsekai-trading.com/
◆「連載 証言 日本レコード史・戦後篇 (19) いち早く動いた日本マーキュリーと長く存続した新世界レコード」『レコード芸術』43(12)(531) <請求記号 Z11-321 >
◆「森田稔先生蒐集グルジア民俗音楽聴覚資料について」『プロジェクト研究』(9) 2013 年度 <請求記号 Z71-R126 >
◆岩澤聡「グラスノスチがもたらしたもの」（CA762）『カレントアウェアネス』No.145 1991.09.20
http://current.ndl.go.jp/ca762
◆ UNESCO ウェブサイト > Baltic song and dance celebrations
https://ich.unesco.org/en/RL/baltic-song-and-dance-celebrations-00087
◆井上頼豊「ショスタコーヴィッチ作曲　オラトリオ「森の歌」」『音楽芸術』12(1) <請求記号 Z11-208 >
◆朝尾直弘 編著『大阪労音十年史　勤労者芸術運動の一つの歩み』大阪勤労者音楽協議会 1962 <請求記号 760.6-A918o >
◆「イーゴリ・モイセーエフさん死去」『朝日新聞』2007 年 11 月 03 日
◆「レニングラード　バレー 七月十五日大衆公演」『日本とソビエト』1960 年 6 月 15 日号 NO.90（通算 307 号）<請求記号 Z85-136 >
◆「ソ連国立アカデミー　レニングラード劇場バレー団東京公演（社告）」『読売新聞』昭和 35 年 4 月 14 日
◆大島幹雄 著『虚業成れり 「呼び屋」神彰の生涯』岩波書店　2004.1 <請求記号 GK166-H4 >
◆「パステルナーク氏へ ノーベル文学賞、劇的な授賞」『朝日新聞』昭和 33 年 10 月 24 日
◆書評委員会 D「取まく政治的雑音の中に 小説 " ドクトル・ジバゴ " の諸問題」『出版ニュース』([446])1959 年 4 月下旬号<請求記号 Z21-164 >
◆マイナビ 2020 ウェブサイト > 一般財団法人 ラヂオプレス
https://job.mynavi.jp/20/pc/search/corp75718/outline.html
◆雑誌 TIME ウェブサイト > Magazine Cover: Van Cliburn - May 19, 1958
http://content.time.com/time/covers/0,16641,19580519,00.html
◆「ソ連から今浦島太郎 帰化の日本兵、25 年ぶり」『朝日新聞』1970 年 5 月 1 日
◆ロシア連邦政府発行紙「ロシースカヤ・ガゼータ」ウェブサイト > В пятницу группа "Машина времени" проведет в московском клубе благотворительный концерт в пользу Японии
https://rg.ru/2011/03/17/mashina-vremeni-site-anons.html
◆「ナウカ　老舗のロシア書籍輸入販売会社が破産」『毎日新聞』2006 年 7 月 20 日
◆国土地理院ウェブサイト > 20 万分の1地勢図
https://www.gsi.go.jp/KIDS/map-index/map-200.htm
◆「歴史的な体制崩壊と不変の底流　1991 年 ソ連のアジア政策」『アジア動向年報』1992 年版<請求記号 Z41-118 >
◆独立国家共同体（CIS）執行委員会ウェブサイト > ЗАЯВЛЕНИЕ глав государств Республики Беларусь, РСФСР, Украины
http://cis.minsk.by/reestr/ru/index.html#reestr/view/text?doc=3447
◆草間時彦「俳句の鑑賞 48 中村草田男の句」『國文學　解釈と教材の研究』29(16)(431) <請求記号 Z13-334 >

＊ NDL オンラインにはロシア語タイトルがローマ字入力されている資料があります。
本記事ではロシア語表記で掲載しました。検索の際は請求記号をご利用ください。

平成3（1991）年12月8日、ポーランドとベラルーシの国境にまたがるベロヴェーシの森の一角のヴィスクリで、ロシアのエリツィン大統領、ウクライナのクラフチュク大統領、ベラルーシのシュシケビッチ最高会議議長が会談し、ソ連の消滅と独立国家共同体（Commonwealth of Independent States, 略称CIS）の創設を宣言した。同21日にカザフスタンのアルマ・アタ（現・アルマトイ）で、バルト三国とジョージアを除く11共和国がCIS創設の議定書に調印し、これによりソ連は崩壊した。

Bialowieza [cartographic material] Ed. 1-AMS (AMS ; M751 Poland, sheet 3623 2)
<請求記号 YG1-P7-5.0-395 >

AMS（旧米国陸軍地図局）が作成した5万分1地形図である。拡大箇所がベロヴェーシの森。5万分1という中縮尺の地図に辛うじて登場する程度の、ほとんど名を知られていない場所で、巨大なソ連が事実上の終焉を迎えたのは歴史の皮肉であろう。

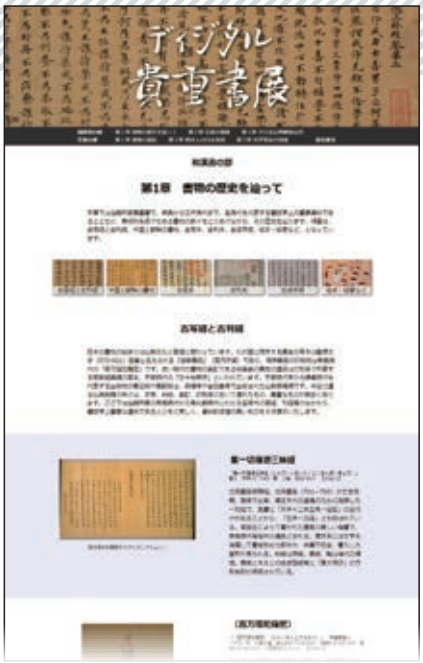
中村草田男が「降る雪や明治は遠くなりにけり」と詠んだのは昭和6（1931）年のことであり、明治最後の年である明治45（1912）年からは20年も経っていなかった。また、明治が終焉したときに、明治34（1901）年生まれの草田男は11歳の少年だったのである。

昭和を代表する俳人に筆者をなぞらえる気は毛頭ないが、時代の遠近法としては、草田男にとっての明治の終焉と筆者にとってのソ連崩壊とは、同じくらいの距離感ともいえるだろう。まさに、ソ連は遠くなりにけりである。

本稿は、筆者の個人的な視座と感慨に基づいたソ連関係資料あれこれであるが、ご笑覧くだされば幸いである。

「ディジタル貴重書展」をリニューアル公開しました

「ディジタル貴重書展」は、電子展示会の第1号として平成10年に公開したもので、国立国会図書館が所蔵する選りすぐりの貴重書を紹介しています。「和漢書の部」では「書物の歴史を辿って」「名家の筆跡」「大日本沿海輿地全図」、「洋書の部」では「書物の意匠」「西洋人の日本発見」「科学革命の浸透」という3つの章で資料を紹介しています。



（右）スマートフォン版（左）PC版

今回のリニューアルでは、国立国会図書館デジタルコレクションへのリンクを加えたほか、スマートフォン等からの閲覧にも対応し、資料と解題が見やすくなりました。国立国会図書館の貴重書を、ぜひお手元でご覧ください。

ディジタル貴重書展
https://www.ndl.go.jp/exhibit/50/

第30回保存フォーラム「収蔵資料の防災―日頃の備え・災害対応・連携協力」

保存フォーラムは、図書館における資料保存対策や技術について、実務者が情報交換、意見交換を行うことを目的として開催するものです。

日本では近年、自然災害が頻発し、各地の図書館や文書館等でもその被害を受けています。収蔵資料の救済に関して、日常からの備えや発災後の初期対応、地域内外・他機関との連携の枠組みや事例を知ることにより、防災・減災の意識を高め、各機関において取り得る対応を考えます。

○日時　12月19日（木）14時～17時（受付　13時30分～）
○会場　東京本館　新館3階大会議室
○内容
報告1：新井浩文氏（埼玉県立歴史と民俗の博物館）
報告2：網浜聖子氏（鳥取県立図書館長）
報告3：加藤明恵氏（歴史資料ネットワーク事務局）
報告4：岡田健氏（国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進室長）
報告5：佐藤従子（国立国会図書館収集書誌部司書監・IFLA／PACアジア地域センター長）
質疑応答
○定員　80名（先着順）
○参加費　無料
○申込方法　当館ホームページをご覧いただき、参加申込みページからお申し込みください。
ホーム＞イベント・展示会情報＞第30回保存フォーラム
https://www.ndl.go.jp/jp/event/events/preservationforum30.html
○申込締切　12月6日（金）17時（定員に達した時点で受付を終了します。）
○問合せ先　収集書誌部 資料保存課
電話　03（3506）5219（直通）
電子メール　hozonka@ndl.go.jp

昨年度の保存フォーラム

国際子ども図書館調査研究シリーズNo.4『読書・学習支援コンテンツ構築及び利活用に関する調査研究』を刊行しました

平成30年度に実施した調査研究の成果をまとめ、令和元年7月に、標記資料を刊行しました。

この調査研究では、読書・学習支援コンテンツについて、国内のコンテンツ提供機関を対象とした事例調査及びコンテンツ利用機関を対象としたニーズ調査を実施し、さらに欧米の学習デジタルコンテンツをめぐる現況についても文献調査を行いました。

このシリーズは、全国の都道府県立図書館や関係機関に配布しています。また、国立国会図書館デジタルコレクションに全文を掲載しているほか、国際子ども図書館ホームページからも閲覧できます。是非ご活用ください。

○問合せ先　国際子ども図書館 企画協力課 協力係
電子メール　kyoryoku-icl@ndl.go.jp

https://www.kodomo.go.jp/about/publications/series/index.html

第32回納本制度審議会および第16回納本制度審議会代償金部会

8月5日、第32回納本制度審議会および第16回納本制度審議会代償金部会が、審議会委員13名、専門委員2名が出席して東京本館で開催されました。

審議会では、令和元年7月1日付けで、委員の委嘱および代償金部会に所属する委員の指名が行われたことが報告され、斎藤誠委員が互選により会長に選出されました。斎藤会長は、福井健策委員を会長代理に指名しました。また、オンライン資料の補償に関する小委員会を設置し、所属委員として7名の委員と2名の専門委員を指名、福井健策委員を小委員長に指名しました。事務局から、出版物納入状況、電子書籍・電子雑誌収集実証実験事業の現状等について報告を行い、質疑応答がありました。

審議会終了後、代償金部会が開催され、奥邨弘司委員が互選により部会長に選出されました。奥邨部会長は、江上節子委員を部会長代理に指名しました。

納本制度審議会委員・専門委員名簿
（五十音順　敬称略）（令和元年8月5日現在）

会長
斎藤　誠　東京大学大学院法学政治学研究科教授

会長代理
福井　健策　弁護士

委員
植村　八潮　専修大学文学部教授
江上　節子　武蔵大学社会学部教授
江草　貞治　株式会社有斐閣代表取締役社長
遠藤　薫　学習院大学法学部教授
相賀　昌宏　一般社団法人日本書籍出版協会理事長
奥邨　弘司　慶應義塾大学大学院法務研究科教授
近藤　敏貴　一般社団法人日本出版取次協会会長
鹿谷　史明　一般社団法人日本雑誌協会理事長
重村　博文　一般社団法人日本レコード協会会長
柴野　京子　上智大学文学部新聞学科准教授
永江　朗　公益社団法人日本文藝家協会電子書籍出版検討委員会委員長
根本　彰　慶應義塾大学文学部教授
山口　寿一　一般社団法人日本新聞協会会長

専門委員
佐々木　隆一　一般社団法人電子出版制作・流通協議会監事
樋口　清一　一般社団法人日本書籍出版協会事務局長

○代償金部会所属委員
奥邨弘司（部会長）、江上節子（部会長代理）、相賀昌宏、鹿谷史明、重村博文、根本彰、福井健策

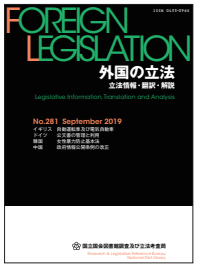
○オンライン資料の補償に関する小委員会所属委員・専門委員
福井健策（小委員長）、植村八潮、遠藤薫、奥邨弘司、柴野京子、永江朗、根本彰、佐々木隆一、樋口清一

審議会に関する情報は、以下に掲載しています。
https://www.ndl.go.jp/jp/collect/deposit/council/index.html

新刊案内

外国の立法　立法情報・翻訳・解説　第281号

イギリスの2018年自動運転車及び電気自動車に関する法律
ドイツ連邦公文書館における公文書の管理と利用―2017年連邦公文書館法制定―
韓国の女性暴力防止基本法
中国における政府情報公開条例の改正



A4　97頁　季刊　1,800円（税別）
発売　日本図書館協会
ISBN　978-4-87582-850-1

レファレンス　823号

アイルランド下院の選挙制度―単記移譲式による比例代表制（PR-STV）の仕組みと機能―
集落営農の経緯と現状―国連「家族農業の10年」に寄せて―
オランダにおける国民投票制度の導入・実施・廃止
医療におけるICTの利活用―九州地方の遠隔医療を中心に―（現地調査報告）

A4　104頁　月刊　1,000円（税別）
発売　日本図書館協会

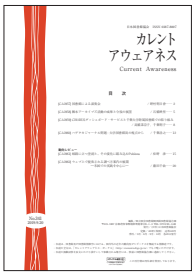
レファレンス　824号

外来語の受容と法律における使用
性犯罪者の化学的去勢をめぐる現状と課題
協定未締結時の駐留軍隊の管轄権をめぐる議論―米国公的機関の見解の整理―
農業者向け経営安定対策の経緯と論点
主要国における内閣制度（資料）

A4　119頁　月刊　1,000円（税別）
発売　日本図書館協会

カレントアウェアネス　341号

図書館による演奏会
脚本アーカイブズ活動の成果と今後の展望
CHORUSダッシュボード・サービスと千葉大学附属図書館での取り組み
ハゲタカジャーナル問題：大学図書館員の視点から
＜動向レビュー＞
岐路に立つ査読と、その変化に踏み込むPublons
ウェブ上で提供される調べ方案内の展開―米国での実践を中心に―



A4　24頁　季刊　400円（税別）
発売　日本図書館協会

平成30年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「絵本と子どもの原点を見つめる―子どもの成長発達と絵本」

子どもと文化を架け渡す絵本
自然と自然史に興味をもつきっかけを作ってくれる絵本
子どもの発達と絵本・読書
絵本を読みあい育ちあう
絵本と子どもをつなぐ国際子ども図書館の実践

A4　96頁　年刊　1,700円（税別）
発売　日本図書館協会
ISBN　978-4-87582-842-6

入手のお問い合わせ
日本図書館協会
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14
電話　03（3523）0812

訂正

本誌で次の誤りがありました。
701／702（2019年9／10月）号
「NDL Topics」33ページ
「消費税率の引上げに伴う複写料金等の取扱いについて」2段落目
（正）複写料金等の消費税率も申込みの受付日（後日郵送複写の場合は当館発送日）が10月1日以降の分については、10％となります。
お詫びして訂正いたします。

11

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2019.11

NO.703
NOVEMBER
2019

CONTENTS

01 <Book of the month - from NDL collections>
Commerce Must Never Rely on the Powers of Government

06 Materials newly available in the Modern Japanese Political History Materials Room

15 Exhibition at the International Library of Children's Literature
100 Years of Modern and Contemporary Art in Picture Books
——From Dada to New Painting

22 Strolling in the forest of books (21)
Through a crack in the Iron Curtain
——Library materials on the Soviet Union in the Cold War era

14 <Tidbits of information on NDL>
No news is good news

21 <Books not commercially available>
The History of Nifty: Our Network Culture

32 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 三浦 良文

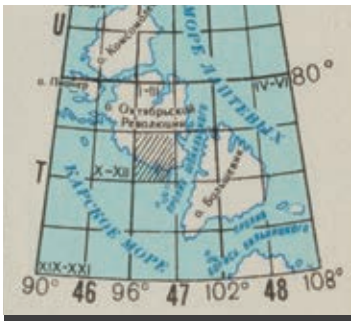
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）
FAX 03（3597）5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
https://www.ndl.go.jp/

令和元年11月号（No.703）
令和元年11月1日発行

印刷所 株式会社 丸井工文社

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（https://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

ISSN 0027-9153



NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

2019.11

国立国会図書館
National Diet Library, Japan

国 国 国
図 会 書